

## 新羅明神記

黒田 智

『新羅明神記』は、天台宗寺門派三井寺園城寺の護法神・新羅明神に関する記録である<sup>(1)</sup>。

外題は「新羅明神記」(題箋)、内題は「新羅大神記」。袋綴一冊で全六七帖、一丁に二〇字×二〇行。訓点・振り仮名・誤字の訂正等の書き込みがある。上・中・下巻の三巻から構成され、中・下巻の間に『当社物忌量』が挿入され、下巻の後に『新羅源氏敬神報賽啓白句』が追記されている。

まず、本書の伝来を奥書等によって復元してみよう。

下巻奥書によれば、応永二〇(一四一三)年三月 日、新羅社司の大友兵部大輔泰之が累代所持の『新羅明神記』を朽損のために新写し、また中巻奥書により、これとほぼ同時期に、泰之が同じく旧本の損傷を理由に『当社物忌量』を新写している。応永三二(一四二五)年二月 日、新羅社預であった常智坊永成がこの『新羅明神記』を書写し、同年六月 日、同じく永成が『当社物忌量』を書写する。その後、『新羅明神記』・『当社物忌量』を合わせ、巻末に『源氏啓白文』を追記して、近世には勝仙院僧正なる者の手に伝来し、延宝八(一六八〇)年の水戸彰考館による洛中の史料採訪の際に書写が行なわれた。さらに明治一八(一八八五)年七月、太政官修史館編集副長官重野安禪が関東六県出張の際に水戸彰考館文庫主管者津田信存に委託して彰考館本を謄写し、これが東京

大学史料編纂所に収蔵されて現在に至っている。彰考館本は戦災等によって現存せず、それを遡る諸本も確認できないから、東京大学史料編纂所謄写本が管見の限り現存する唯一の孤本となる。

次に、本書の内容を見てみよう。

上巻は、智証大師円珍の伝記に費やされる。円珍の誕生から幼・青年期における靈験譚、入唐後の足跡をたどり、帰途の船中に影向した新羅明神や教待和尚・大檀越であった大友與多・都堵牟麻呂の引導によって、園城寺に伽藍を再興し、新羅明神の社壇を営む<sup>(3)</sup>。上巻は、円珍伝としての性格上、九世紀の事績に偏っており、下限年代は社司・大友為泰が社壇を南向きに改めた長徳三(九九七)年である。

中巻では、余慶の靈験譚、正暦四(九九三)年の寺門山門抗争と相次ぐ凶事、永承七(一〇五二)年の初度の新羅祭礼と和讃、前九年合戦における源頼義の新羅社祈願、天慶の乱における明達内供奉の祈願、成尋阿闍梨の参籠、慶耀の靈験譚、後三条天皇の病悩・平癒祈願と頼豪説話、等の新羅明神に関する靈験譚が羅列されている。これらの説話はほぼ一世紀に集中しており、これに天治二(一一二五)年・仁平四(一一五四)年の二・三度の新羅祭礼や応保元(一一六一)年の後白河臨幸といった二世紀半ばの記事が混入している<sup>(4)</sup>。なお文中の「当代」は近衛天皇(一一四一―一五五)に比定できる。

下巻は、冒頭に「応驗」と注記され、引き続き新羅明神と眷属の宿王・般若菩薩に関わる靈験譚が続く。藤原保子・二条天皇・觀智・慶智・白河辺の公卿女等の靈験譚に、赤山明神の奉祀、承元四（一二一〇）年の新羅祭祀・新羅三十講・新羅念仏等の記事を挟んで、能珍・明智、円聰の除病延歳の奇瑞譚、さらに三井寺の由来と新羅社司・大友氏系図、源氏の新羅神崇敬と新羅源氏系図等を収録している。とりわけ承元四（一二一〇）年新羅祭舞童の興福寺への發遣は、天福元（一二三二）年頃の成立とされる『教訓抄』巻四にも記され、両寺の文化交流を垣間見せて興味深い。<sup>(5)</sup> 下巻は、後述する社司系図を除けば、主として一二世紀半ばから一三世紀初頭の出来事が扱われている。

このように三巻の構成が原則として記事の年代によって分類されることから、記録・文書類が漸次書き足され、増補されていった成立事情が推測される。そして、早くて一三世紀初頭以降には、本書の原型が整えられていた可能性がある。

実際、本書は南北朝期以降に作られた園城寺の寺誌の中に度々引用されている。例えば、『園城寺伝記』は、三箇所「新羅記」なる書からの引用が明記されている。<sup>(6)</sup> 別に『新羅太神記』が典拠ともされており、『当社物忌量』を収載していることから、本書の引用は疑いない。応永期（一三九七～一四二八）に園城寺慶慶院志晃が著したとされる『寺門伝記補録』の巻一・二・三は「新羅祠記」と題されて、新羅明神関連の記録を集成したものである。また聖護院所蔵『新羅略記』は、『新羅記』の抄出とされ、本書の引用をうかがわせる。<sup>(7)</sup> さらに『寺門雜記』は、『新羅太神記内拔書』として円珍の年譜を抜録している。<sup>(8)</sup>

応永期の園城寺では、建武の回祿からの一定の復興をみて、『園城寺伝記』・『寺門伝記補録』・『寺徳集』・『三井統燈記』といった、寺内に散逸する文書・記録群を蒐集・保存する寺誌編纂事業が盛んに行な

われていた。<sup>(10)</sup> 『新羅明神記』は、これらに先行して成立した園城寺の根本史料の一つであったと考えられる。

さらに、『新羅明神記』の成立背景を考えてみよう。

先に述べたように、本書は、応永三二（一四二五）年二月日に新羅社預であった常智坊永成が書写したものである。中巻奥書にあるように、本来『新羅明神記』は、「努々他見すべから」ざる社司家・大友氏累代の秘宝であった。ところが、下巻奥書によれば、応永三二年、社司・大友泰之は、跡継ぎであった侍従泰清の死去によって相続すべき子孫を失ない、社司家が断絶の危機に瀕したため、たとえ子孫が絶えたとしても、新羅明神の神威を絶やさないために、記録の転写を預・永成に許可したとされている。<sup>(11)</sup>

但し、下巻所収の社司系図を見ると、応永三二（一四二五）年七月二二日の大友泰之の死去、永享八（一四三六）年一〇月二八日の大友泰広の兵部大輔補任の事績が載せられている。これらは永成の書写時期である応永三二（一四二五）年一月よりも下り、明らかな追記とみなされる。この二つの事績は、何故追記されたのであろうか。どうやら『新羅明神記』の成立には、社司家・大友氏の断絶の危機と再興をめぐる事情が関わっているようである。

新羅社司家の歴史と『新羅明神記』の成立を、『新羅明神記』下巻所収の社司家・大友氏系図を素材に明らかにしたい。<sup>(12)</sup> 新羅社司家・大友氏系図は、『新羅明神記』のほかに『新羅略記』上巻・『寺門伝記補録』巻一・『寺門雜記』に収載されており、これらは少なからぬ異同をもっている。<sup>(13)</sup> 各本の異同を一覧した「社司系図対照表」を元に考えてみよう。社司系図は、天智天皇にはじまり大友泰広に至る二〇人の人物を掲げている。それぞれに付された注記は、生没年・享年・官職・出自に加え、新羅明神との応驗・三種悉地法の受法等の事績である。

『新羅明神記』所収の社司系図は、その記載方式や内容等から、少なくとも三次にわたって書き継がれたものと考えられる。すなわち、①大友為泰制作の天智天皇から為泰までの系図、②大友泰之の追記になる広政までの系図、③大友泰広による泰広自身までの追記、の三度の書き継ぎである。

大友氏は天智天皇にはじまり、大友皇子の発願によって、その息・與多麻呂が朱鳥元(六八六)年に開創して以来、園城寺の大壇越の地位にあった。都堵牟麻呂は教侍和尚とともに円珍を招いて伽藍を再興、村主を経て清村より代々新羅社司を世襲することになる。

最初の社司である大友清村には、本書上巻に出生にまつわる奇瑞譚があり、また下巻奥書によれば、その息大友雅楽亮為泰は新羅明神と応対して秘文を受け、仏地院法印采算なる者に秘文を進上するも、まもなく紛失したという。秘文や社司系図を含む累代の『新羅明神記』は、当初この為泰によって作成されたものではなからうか。社司系図が「それより以来(秘文の)相承断絶せず」とあって、為泰を始点として連続性を強調しており、①中の人物達の記載情報が詳細である点も、この推測を裏付ける。

続く泰生から広政に至る②期の注記の情報は、為泰が作成した①期のそれに比べて簡潔である。とりわけ泰生・清生・政氏は、『新羅明神記』本文に数度登場するものの、系図には享年注記ばかりで活躍期も精確ではない。これは泰之が為泰作成の社司系図に追記を試みた際に、為泰以降の先祖の記憶が薄らいでいたからではあるまいか。対照的に、泰之の曾祖父・清政や祖父・貞政に三種悉地法受法の記事があり、父・広政に関する記述が比較的豊富な点は、泰之からみた親疎の度合をよく示している。もとより泰之が改めて社司系図に追記を行なった契機は、応永二〇(一四一三)年の『新羅明神記』累代本朽損による新写にほかならな

い。この時、泰之が累代本を最終的に現在のかたちに整理したと考えられる。

問題の③期は、それ以降の社司・大友氏の趨勢を能弁に伝えている。とりわけ注目したいのは、第一に、泰政に注記された「横死」という言葉が『新羅明神記』と『寺門雜記』にだけあって、他の二書には見られない点。第二に、泰之・泰広だけに、ともに兵部大輔に補任された際の口宣案が書写されていること。第三に、泰之・泰広の生年月日だけが一二支の重複する特別な日時であると記されている点。第四に、「母泰之嫡女」とする泰広の出自が、『新羅明神記』にだけあって、他の三書にみられない点。第五に、泰広に付された「大儒」の言葉が他の三書にあって、『新羅明神記』にだけ見られない点、である。

すなわち、代々一〇〇歳を越える長寿を誇ってきた大友氏の命運は、応永二〇年以降、おそらく泰之の嫡男であった式部大輔泰政の出家遁世という事件により暗転する。代わって立った泰政の養子・泰久は早世し、源祐と名乗った泰政は「横死」という非業の最期を遂げる。さらに望みを託した侍従泰清も応永三二(一四二四)年までには早世し、絶望した泰之は応永三二(一四二五)年二月に預・永成に対して『新羅明神記』の書写を許可して、そのわずか数ヶ月後の同年七月二二日に死去してしまふ。ここにおいて社司家・大友氏は事実上断絶したと思われる。

泰之の死去から一〇数年を経て、泰之嫡女の子と称する泰広が、社司家再興を図って登場する。しかし、女系の一子孫にすぎず、何ら社司家当主たる基盤をもたない泰広は、祖父泰之と同じ特別の出生日時を標榜し、他ならぬ泰之と同じ兵部大輔に任官することで、自らの社司としての立場を正当化する必要があったのではないか。晴れて泰広が自ら望んだ兵部大輔に補任される永享八(一四三六)年八月二十八日という記念すべき日の前後に、預・永成が伝えた『新羅明神記』所収の社司系図に祖

父の事績とともに自らの履歴を書き加えたものと思われる。

『新羅略記』所収の社司系図は、『新羅明神記』とソースを同じくしているものの、大友黒主と泰久に注記が無く、泰政の「横死」は消され、「泰清」の名が削除されているから、やや遅れて後代に写された社司家の嫡流系図といえよう。既に泰広は、「大儒」と称される碩学の地位を確立し、『寺門雜記』によれば、数百人の門弟を抱え、山門の谷々や洛中の諸寺で講談を催す程の名声を獲得していたことが知れる。そこにはもはや祖父・泰之との共通した事績を記す嫡流工作をみることはできない。泰之から泰広への当主交代劇はより自然なかたちで系図に記され、社司家の系譜意識の中に根付いたのである。

以上のように、『新羅明神記』は、社司家・大友氏の断絶と再興の歴史の産物であり、ほぼ同時期の園城寺における寺誌編纂事業に少なからぬ影響を与えてゆくのである。そうした一連の動きを見るに、園城寺は確かにこの時期一つの転換点を迎えていたといえるであろう。

### 〔註〕

- (1) 新羅明神に関する先行研究を挙げると、辻善之助「新羅明神考」(『日本仏教史研究』第一巻 岩波書店 一九八三年、初出一九一五年)、『園城寺の研究』一九三三年、宮地直一「平安期に於ける新羅明神」(村山修一「比叡山と天台仏教の研究」名著出版 一九七五年、初出一九三二年)、奈良国立博物館編『垂迹美術』角川書店 一九六四年、宇野茂樹『近江路の彫像』雄山閣出版 一九七四年(初出一九六八・七〇年)、景山春樹『神道美術』雄山閣出版 一九七三年、亀田孜「ボストン美術館蔵新羅明神を脇侍とする弥勒如来像」(『仏教芸術』九〇 一九七三年)、猪川和子「三井寺新羅明神像」(『國華』八〇〇 一九五八年)、荻野三七彦「赤山の神と新羅明神」(福井康順編『慈覚大師研究』天台学会 一九六四年)、渡辺信和「新羅明神発心者事」考(『馬淵和夫博士退官記念説話

文学論集』大修館書店 一九八一年)、東博・京博・名古屋市博編『三井寺秘宝展』日本経済新聞社 一九九〇年、石川知彦「新羅明神の種々相」(『日本美術のイコノロジー的研究』平成元・二年度科学研究費補助金総合研究A研究成果報告書 代表百橋明徳 一九九一年)、伊藤史朗「同聚院不動明王像と園城寺新羅明神像」(『國華』一一〇三 一九九六年)、松尾恒一「園城寺新羅社をめぐる祭祀と芸能」(『延年の芸能史的研究』岩田書院 一九九八年)、山本ひろ子「異神」平凡社 一九九八年、阪口光太郎「新羅明神譚の片隅から」(『文学論藻』七二 一九九八年)、黒田智

「新羅明神と藤原鎌足」(『仏教芸術』二三八 一九九八年)、大阪市立美術館「役行者と修験道の世界」毎日新聞社 一九九九年等である。

(2) 高埜利彦「修験本山派院家勝仙院について」(『近世日本の国家権力と宗教』東京大学出版会 一九八九年)

(3) 円珍伝をめぐる研究は、佐伯有清「智証大師伝の研究」吉川弘文館 一九八九年、同「円珍」吉川弘文館 一九九〇年、小山田和夫「智証大師円珍の研究」吉川弘文館 一九九〇年等参照。『園城寺文書』(講談社 一九九八)の刊行も進められており、中世園城寺研究の進展が期待される。

(4) 中巻には、文暦元(一二三四)年の慈護房大輔参籠の記事が収載されているが、前後の時期よりみて治暦(一〇六五・六九)あるいは承暦(一一〇七・一一〇八)の誤写である可能性を指摘しておきたい。

(5) 『続群書類従』一九輯上、前掲注(1)の松尾恒一・黒田智論文参照。『大日本仏教全書』一一七 園城寺伝記・寺門伝記補録 名著普及会 一九八一年復刻版。三箇所引用とは、①巻四「新羅社立造事」の

「此事新羅記上巻可見也、②同「金堂水事」の「和讃新羅記有之中巻也、聖願寺之事同記有中巻也」、③同「金堂水事」の「祭文新羅記有中巻也」である。『寺門伝記補録』は正伝輯書の筆頭に「新羅太神記」を挙げている。

(7) 前掲注(3)。その成立年代をめぐっては、今枝愛真氏により疑義が出されており(『寺門伝記補録解題』『大日本仏教全書』九九 解題三)、後述するように、巻二所収の社司系図の大友泰広に「兵部大輔」が記され

ているのは、永享八年以降の成立もしくは追記を示す傍証となり、成立年代に再検討の余地を残す。

- (8) 村山修一校注・解題『神道大系』論説編一七 修験道 名著出版 一九八八年。村山氏は、「解題」の中で、「寺門伝記補録」の「主な出典は恐らく上記の『新羅太神記』なるものであり、それに対し『新羅略記』が抄出された原本は『新羅記』なるもの」としているが、後述するように、むしろ本書（内題「新羅大神記」と「新羅略記」）の親近性は強いと考えている。

- (9) 東京大学史料編さん所蔵写本（架蔵番号三〇一五）

- (10) 福家俊彦「智証大師文書の伝世と中世園城寺の再興について」（『天台学报』四一 一九九九年）、芝野康之「園城寺の中世文書について」（『園城寺文書』二 中世 一九九九年）等参照。

- (11) 新羅社の社内組織は不明であるが、下巻所収の新羅念仏の神供では、外陣にいる宮仕から預・所司・堂僧の手を経て内陣神前にいる神主に手渡されており、預の地位がうかがえる。

- (12) 中世系図研究は、一九八〇年代半ば以降、網野善彦・石井進・青山幹哉・飯沼賢司氏等によって豊かな、新しい研究の可能性が指摘されてきており、本稿もそうした成果に多くの示唆を受けた。黒田日出男『鎌倉遺文』の「系図」(『鎌倉遺文研究 鎌倉時代の社会と文化』東京堂出版 一九九九年) 参照。

- (13) 『新羅略記』所収系図の注記は、原則として『新羅明神記』所収系図の注記内容に含まれており、原本を同じくすると推測できる。しかし、『寺門伝記補録』所収系図は、他と異なる独自の内容を含んでおり、別のニューソースを元としているかもしれない。後述するように、「横死」や「大儒」の注記の有無から、『新羅明神記』が他に先行して成立したと考えている。

- (14) 大友村主は、社司系図によれば、従七位下という低い官位にとどまっております。『日本後記』等に頻出する甲賀付近の豪族・大友村主であると思われる。この村主によって奈良時代に建立された氏寺が園城寺として再興され、後世に山門に対抗するために大友皇子の末裔として付会された

のであろう。『国史大辞典』（吉川弘文館）、星宮智光「智証大師円珍和尚の園城寺再興とその意図」（『智証大師研究』同朋社出版 一九九〇年）等参照。

- (15) 上巻末部に大友村主の妻妾が白色の光とともに利剣が口中に入る夢を見て、清村を懐妊したとする。また上巻冒頭では、船に乗って朝日が流星のごとく口中に入る夢を見て懐妊したとする円珍の出生譚が語られている。このような日輪受胎説話は、良源・後村上天皇・豊臣秀吉等の天台系説話によく流布され、また東アジアに感生帝説・始祖神話として分布することが知られている。日月星の三光信仰については、別稿を準備している。北島万次「豊臣政権の対外認識と東アジア世界」（『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房 一九九〇年）、西山克「日輪受胎」（林屋辰三郎編『民衆生活の日本史・火』思文閣出版 一九九六年）参照。

- (16) 因みに、慶雲元（七〇四）年生まれの都堵牟麻呂は、一四七歳の時に円珍と会ったとされるが、嘉祥三（八五〇）年は円珍の入唐直前に当たり相応しくない。また清村は延喜一九（九一九）年生まれ、天元四（九八二）年死去とされ、一一八歳の享年は合致しない。

（付記） 本史料の翻刻にあたり、清水亮・田村憲美・宮崎肇氏に御教示をいただいた。

新羅社司系図対照表

書繼	人名	新羅明神記	新羅略記	寺門伝記補録	寺門雜記
①	天智天皇	日本詩賦始造、古今序見	(注記なし)	三十九代	人皇三十九代、日本詩賦始造見古今序
	大友皇子	我朝太政大臣之始、母采女伊賀宅子娘也、天智天皇十五年正月五日、始任太政大臣、御歳廿五歳、同年十月東宮、同十二月五日御即位、天皇十一年〈壬申〉七月廿三日入滅	天智帝皇子廿五而薨	又名伊賀皇子、天智第五子、母伊賀采女宅子、天智十年太政大臣、本朝此官為始、天武元年七月二十三日薨、年二十五	本朝太政大臣之始、母伊賀守宅子也、天智天皇十年正月五日始任太政大臣、御歳廿五歳、同十年同十二月即位ト云々、可尋、同十二年壬申七月二十三日滅、一説謀反故自殺
	與多麻呂	大友皇子御子、母天武天皇御娘	大友皇子御子	或記曰、又名與多王	官大臣、母天武帝御娘
	都堵牟麻呂	官途大臣、慶雲元年生、一百四十九卒	為多御子、慶雲元年生、一百四十九而卒	始見智証大師時年一百四十七、卒年一百四十九	慶雲元年生、一百四十九ニ卒
	村主	擬大領從七位、天長生、天曆九卒一百十九	天長年生、天曆九年卒、一百十九、大友夜須良麿	甲賀郡司擬大領、從七位下字夜須良麿、年一百十九	天長生、天曆九、一百十九、從八位上
	黒主	古今作者、大友夜須良麻呂、宣化天皇后胤、猿丸大夫子、大伴列躬子養子也、延喜大嘗会歌詠也	(注記無し)	養子、実ハ大伴ノ列躬之子也、	宣化天皇后胤、猿丸太夫子、大伴列躬子養子也、延喜大嘗会歌詠
	貞吉	玉張外少初位下、建部神主始	建部社務始	主帳外少初位下、建部神主	建部神主始
	清村	明神応対人、当社社務始、從七位下、延喜十九年生、天元四年卒一百十八、	当社社務始、從七位下、延喜十九年生、百十八	新羅最初社司、從七位下、年一百十八、神応対人	新羅社務始、從七位下、延喜十九生、天元四年卒、一百十八、神応対人
	為泰	明神応対、故秘文從神受之、自其以來相承之不斷絶、康保四年生、寛治元年卒、一百十八	明神応対人、從神受秘文、寛治元年卒、歳百十八	雅楽亮、年一百十八、神応対人	明神応対人、故秘文從神受之、自其以來相承之不斷絶、康保四年生、寛治元年卒、百三歳
②	泰生	白河院比人、長治二年卒、百三歳	長治二年卒、歳百三	蔵人頭、年一百三	白川院比人、長治二年卒、百三歳
	清生	長承比人、一百十六卒	長承年人、百十六歳而卒	常陸守、年一百十六	長承比人、百十六卒
	政氏	常陸守、九十八卒	常陸守、九十八歳而卒	常陸守、年九十八	常陸守、九十八卒
	清政	明神応対從神有、正治比人、百六歳卒、勅三種悉地受之	明神応対人、從神受三種悉地之法、百六歳而卒	日向守、年一百六、神応対人	日向守、正治比、百六十卒、貞政夢清政為文殊師子放光飛去ト云々、明神応対人從神有三種悉地師乘伊僧正
	貞政	常陸守、卒八十一、康元元年生、三種悉地匠師、元弘二年乘伊僧正	常陸守、深草院、康元元年生、元弘二年卒、歳八十一	常陸守、年八十一	常陸守、康元々年生、元弘二年卒、八十一、三種悉地師乘伊僧正

	広政	三種悉地匠師南院北林坊泉恵、侍従後宮、日向守、明徳二五日卒、七十八、参円満院尊悟親王御対面之時、於大床円座主之上於檜扇被敷之、其役者児也、被恐神形敷	明徳二年、七十八歳而卒	日向守、侍従	侍従、後日向守、明徳二年五月卒、七十八、三種悉地師北林房泉恵、参円満院尊悟親王御対面之時、於大床円座主之上於檜仰木被敷之、其役者児也、被恐神形敷
③	泰之	三種悉地匠師北院禅竜房、兵部大輔、永和元一二月補任、上卿藤中納言、藏人左少弁藤原俊任奉、文和三年甲午三月廿五日午時生、午年午日午時生、応永三十二年七月廿二日卒、七十二歳	文和三年三月廿五日生、応永三十二年七月廿二日七十二而卒	兵部大輔、年七十二	兵部大輔、永和元十一月補任、上郷藤中納言、藏人左少弁藤原俊任、三種悉地師北院禅龍房祐順、文和三年甲午三月廿五日午時生、応永三十二年七月廿二日卒、七十二才
	泰政	式部大輔、遁世法名際源祐、横死	式部大輔、遁世法名源祐	式部大輔、遁世法名源祐	式部大輔、遁世法名際源祐、横死
	泰久	早世、泰政養子	(注記無し)	泰政養子、早世	早世、泰政養子
	泰清	侍従、早世	(人名無し)	侍従、早世	侍従、早世
	泰広	母泰之之嫡女也、子也、上卿中御門中納言、永享八年十月廿八日宣旨、大友宿弥泰広宜令任兵部大輔、藏人頭左近衛中将藤原隆遠奉、応永廿七(庚子)年八月三日生子日子日子時生	大儒、応永廿七年庚子八月三日子日子日子時生、	兵部大輔、大儒	応永廿七庚子年八月三日生子日子時生スト云々、三種悉地師秀算法印禅龍房上定房、今東円房也ト云々、永享八年十月廿七日宣旨、上郷中御門中納言、大友宿弥泰広宜令任兵部大輔、藏人頭左近衛中将藤原隆遠奉、泰広天下大儒、門弟數百人在之云々、常書談之所、山門ハ谷々、於洛施薬院・妙泉院寺・立本寺・建仁寺・洞春院、皆講談之所也、

〔釈文(承前)〕

凡例

- 一、翻刻は、東京大学史料編纂所謄写本『新羅明神記』(架蔵番号二〇一二・二六四)を底本とした。
- 二、原則として常用字体を用い、底本に付された訓点・振り仮名は、原文の通り翻刻した。誤字の訂正を示した右傍注は煩雑となるため省略し、正しい文字に変えた。
- 三、文中に適宜、読点・並列点を付した。
- 四、底本に誤記があると思われる場合、適宜傍注を付し、〔 〕内に正しい文字を記した。
- 五、和暦には西暦、人名は( )をもって傍注を付した。
- 六、中巻の「新羅明神和讃」、永久四年・同五年「後三条天皇宣命」、『当社物忌量』は『寺門伝記補録』、下巻の『新羅源氏敬神報賽啓白文』は『新羅略記』に所載のものと同文であるため省略した。

新羅大神記

夫仏日照三五天之雲一、余光映二百億之空一、長夜之暗忽晴、無明之眠早覺、如來逝去之後、迦葉・阿難等之尊者、竜樹・竜智等菩薩、此外頭密之樞鍵世々出現、晨旦無畏・不空・南岳・天台等祖師代々出給、日域弘法・伝教・慈覚・智証等大師、或權者或化人、不知其數一、爰叡山延暦寺第五座主入唐伝法阿闍梨智証大師者、元是讚岐国金倉郷人、御父和氣公宅成景行天皇苗裔、御母佐伯氏、弘法大師姪、或夜夢乘一船、朝日如一流星(八二四)飛來入三口中一、見無幾有(八二五)懷妊一、嗟峨天皇御宇弘仁(八二四)御誕生、同六年(八二五)二歳之夏朝、於後苑之麻陰一放光、三歳之春暮、雖珊瑚之蘭臺一不見、家中驚駭尋方々一、遙山脚

松本陰浅茅原有塚、々上交卯天童八人中一竹馬鞭芥難戰遊戲、此童子者不動八大童子也、彼塚八遊塚云々、五歳申時十一月八日晝、端嚴殊妙天女現幼稚大師示曰、汝三光中為明星天子精神一、今得誕生一、然則虚空藏化身、一乘仏法悟王城鬼門、当山比叡山謂、彼山伝教最澄為師達二教門一、後同南山成二園城寺仏法主二弥勒慈尊教統、

三十二歳時、復誕生、帰国法味可施、其時我現二伽梨帝護法形一、往二興隆仏法所一、可守二寺内仏法一、指南昇天、亦七歳御時、雲衣蟬翼童子二人現曰、汝從二父母未始一、得二文殊大聖教一、令守護一如二影隨二形一、被仰隱身給、

八歳春比、尋因果経自誦給、十歳秋、毛詩・論語・孝経・漢書・史記・文選等誦給、誠上智不習自知、多羅聚落迦葉童子七歳儲三三六疑一、仏性常住法一、青竜寺恵果大師七歳受三昧耶戒法一、登二阿部灌頂壇、雖幼稚一窮二法理一如二斯、

淳和天皇御宇天長(八二七)四年十四歳、叔父仁徳随初登山、伝教大師入室入順三沙門第一座主義真和尚一、法華・金光明經・大毘盧舍那等大乗経天台章疏誦給、同九年御出家(八三三)十九歳、同十年四月十五日御受戒、同年仁明天皇深草天皇叡信御受法(依夢告、承和五年冬、金色不動明王手取二刀劔一足踏二虚空一、石殿通)言、御年廿五歳、同七年夏末、從二大聖明王一、雖三

受二立印儀軌并三昧耶戒灌頂一、未現二真容一、只以二影声一授之、同年七月十六日晝、復生身黄不動現宣、夫阿部灌頂大法者、諸仏秘藏之極理、即身成仏之径路也、法界令二流転一眾生可二度脱一、我與汝往昔墮二畜生中一、得二微笑恩一、今報為汝授二灌頂一、令住不二退位一云々、祖高

仁明天皇御宇嘉祥二年十一月八日、観念之窓前、座禪之床上、仮催二睡眠之機一、結聞重之夢一、一登山峯二巨梯一、二乘二白象一至花(花蔵世界)三越大河海橋、四得二金銀華瓶、五昇樹木取菓、六乘師子遊行、七乘牛



鹿馬等、八孔雀東出聲、九現美女佩帶、十車乘得數珠已上、五更鐘聲破彈指之夢、十八公風驚利那之眠、行集蟻宮、騷人過二十余之星霜、遊胡蝶之苑、莊子送百年之歲月、誠是一念非一念、則是久遠劫無量非無量、即此一刹那也、  
(八五〇)

嘉祥三年春比、山王告大師曰、汝入唐至時、急渡彼土、弘法可弘通云々、此由奏聞、文德天皇大歡感、則勅許、  
(八五三)  
仁寿元年四月十五日、太宰府趣便船待、同三年(八五三)御年八月九日、大唐商人欽暉云者、被召船、已解纜隘路遙漕出御詠、  
乃利乃布祿、佐志天遊久身實、毛路々々乃、神毛仏毛、和礼遠美曾奈辺

遙分東土之浪、遠望西天之雲、途中俄惡風吹、來舟楫潮、潮槽棍折碎、一葉身万死一生、琉球国着給、八月十四日、陸地海上持鋒劍、鬼類如禽獸、異形群競船中商人等失魂銷肝、大師手擲獨帖、口唱二神呪、忽金色不動明王顯、艦前之空、火炎熾上、利劍頻激、則鬼形恐怖如雲消、如霧散、明王立方船真言大師授之、日晴風止、御船遠澳津之天、誓心決定、則魔宮振動悉地成就、則障導不融、三千

七百里過嶮難、大唐南道福州連江縣著給、日本仁寿三年八月十四日也、異朝御門宣宋皇帝年号大中七年也、福州林師準謁大師、從本如知人、則奉置越府開元寺、此值中天竺国大那蘭陀寺般若恒羅三藏、一、受梵字悉曇章、逢天台智者大師第九代法弟子沙門良普、宗旨講授旧疑抄門法決、至長安城一遇善無畏、三藏第五代法法青龍寺法全阿闍梨大、含笑諾曰、汝於日本見生身不動、

吾於此国一拜二大日如來、師弟子與弟子幸々、汝可來事、我從本知故、我待汝年久、今正相見、大吉、矣、  
(八五四)

大中八年正月十六日、夫法華八句有秘文、昔周穆王帝得八疋之天馬、是下化房星之精神、成驊騮之逸足、背如竜、頸似鳥、骨疎筋高胎肉少速如飛、四荒八極踏偏三十二蹄、無歇時、屬車軸折趁

不及、山復山越、崔嵬、水復水過、嶮浪、靈山淨土望法華會座、

帝三匝三礼、一面踞跪、一心合掌、祇尊穆王憐近梵語和漢語、曰、汝持三法安二国家有二秘法、則汝授之矣、天竺類婆安羅王漢上周穆王、日本其不合尊同時代、王婦本國一治二天二一年旧、故普門品謂二当途王經、爰慈童誇一顧阿、謬超二龜文、博陸大怒須謫遠山一矣、穆王潛哀慈童曰、惆悵而丹心黯、然而亡精只別離之愁淚、汝謫所可伴、密被授二句偈、遷二郡嶽山幽谷、九夏三伏之暑月拭汗、玄冬素雪之寒朝苦身、夜終夜豺狼之聲充耳、畫終畫毒蛇之忿遮眼、霜露洪膚、雨雪敲面、倚松樹書二菊葉文一持二六時中、依之虎兒垂舌、野干振尾、魑魅和顏、魍魎為伴、經日、累年羽化成仙、延二八百歲上壽、汲二下流一輩三十余家持二五百歲、一心三々即位々々六觀々々三尊々々口依此菊葉二句偈流九事九月九日也、故菊酒上壽謂也

妙音手觀世音、聖觀音、梵音十一面海潮音、准照勝彼如意輪、世間音、馬頭真觀准明、清淨觀十一面、廣大智惠觀、悲觀、馬頭及慈觀、常願常瞻、聖觀音、  
(八五四)

同八年二月、所々聖跡巡礼中、明州医王山善導和尚、光明寺唐太宗慈恩寺五色藤、漢明帝白馬寺、白居易望海樓石季倫金谷園花名所、遺愛寺鐘聲西成三時鳴、余三時鳴竟宮取、雖不鳴云々、昆明池蓮色言辭難、單、大秦国浙江南天台峴

天台山禪林寺石馬有道場、智者大師法華三昧修行時、普賢菩薩乘二白馬來、其馬忽成石、在今亦鼓石也、智者說法時、駭二此石聽衆集、智者御入滅後、余人雖打不鳴、今大師驅之、石響非二山谷一諸聞二一天下、又巨石橋一見銀地一巡金地、

同年九月、大秦国江東五臺山至二青凉山一、大聖竹林寺人二漸堂一、曼荼羅摩訶曼荼羅華曼殊沙華摩訶曼殊沙華粉々、聖衆雅音操菩薩歌舞粧、舌頭難及言句巨演、普賢菩薩隨二遂無數眷屬一、文殊大聖圍二繞一万菩薩一、坐二師子之床一、開二竜馬之問一、講二千臂千鉢經一、汝未知乎、当帝宣宋皇帝先身在二日本田珍一、今報則竭仰寧度天志、雖切暫可留、其謂者從是八百里道終降二沙石一、山風流沙河際湖水過漲渡不渡、九百里

謂者從是八百里道終降二沙石一、山風流沙河際湖水過漲渡不渡、九百里

山路險難、蒼嶺蒼木落葉悉似、劍如雨、北巒鉄門開閉無隙通不、通、十六万八千里行過、雖有五天竺、弘法成未渡非益、暫逗此土、可汲〔八五五〕法水淵底、深諫畢、

同九年二月比、於蘇州一大師御違例送二日數一、爰捺君直家寄宿明王現速除御惱、

同年五月、法全大師重兩部大法授一之、此青龍寺有三重經藏一、先開二

下經藏一、大日經義積廿卷〔延力〕(八〇四)是草被授〔延力〕(八〇四)弘法大師〔延力〕(八〇四)正月〔延力〕(八〇四)曆廿三年〔延力〕(八〇四)開二中經

藏一、大日經義積十四卷被授一〔延力〕(八〇四)傳教大師〔延力〕(八〇四)正月〔延力〕(八〇四)曆廿三年〔延力〕(八〇四)開二中經

詮曰、未機至矣、今殘上之開二經藏一、大日經義積十七卷本末合廿卷、一行阿闍梨後三藏直之、妙本為留〔延力〕(八〇四)希特於來際一、法全大師執筆書寫之、

與二大師一重宝義積也、予於二本国一見夢、此等被合催一感涙一、大師御歸朝後、弘法大師遣一護法神於唐坊一、暫時退座隙取之、逃去黃不動追

係奪婦、被置一嗟峨殿上、大師大周章之處、清和聖帝以三前相撲〔延力〕(八〇四)樣橋朝臣好樹一、為二勅使一被送二大師本坊一、超二絶他門一不思儀一也、

同年九月、拳一嵩山一見二崑嶽巒一、誠天近地遠、松柏阡眠青苔藏蕤中有二空殿之樓閣一、華攘耀二雲楣一、玉璫映二霞一、日月和影、衆星奪光、

四塞鉄廻築地四方鉄閉二門戸一、若為入二内寸步之處、虚俄陰暴風頻吹響電龜降、冷肝迷心、雷鼓鳴振動霹靂響颼、火赤水瀧漲落、大師既為

潮火印坐血水分二御身一、別二左右一宛磐石破洪波一、河島他二重浪一不異、良瀧水如一本止、復山谿颼風吹數峯麓、電光激火雨降初熾燃、大師水印

座惠日銷二霜露一、疾風弘二雲霧一甚、爰數忽鬼神頭、目光如二日月一、口炎似二爵火一、忿怒跋扈之勢噴悉吐之形、頸連二礮頭一、手提二靈蛇一、

彈指面難二向一、刹那見不能、鬼神大音揚云、不〔延力〕(八〇四)易二有漏之依鉢一、來二

此所一之条、太以不可思議、裂二身寸々一、碎二骨分々一、猶有〔延力〕(八〇四)余者哉、

暫浮二沈東西南北一、縱二橫四維八方一、身上出火身下水、種々現二神

變一、多々見二威勢一、嚇聾大師拜之、是則身蛇帝王白還貴思余時鬼神

立變一形、柔和辱肉而、廻二芙蓉之臉一、動二丹果之脣一、和言辭曰、經

僧祇耶劫之春霞昔、謂無戲一論如來一送二五百塵点之秋霜一、今号二文殊

師利菩薩一、劫初難卵之古、玄清上二于天一、黃濁下二于地一、以還山河

草木未別当初主二汝土一、湛々蒼海原五色浪唱〔延力〕(八〇四)法音一、陽々巨海底大日

如來印文和二光円一、彼印文者、流布弘法遍二人偏可離一〔延力〕(八〇四)生死一、必義也

矣、諸法從縁起羣互顯一形、神是則天神七代始国常立尊也、伊弉諾・伊

弉册尊〔延力〕(八〇四)此二神国一也、代二神御子一、地神五代初日神我也云々、爰彦火々出現尊

御父天彦尊得二勳氣一、今至二撰津国住吉浦一、其所住老翁出來曰、何事

漂問、尊答曰、予失二父釣針一故云々、翁云、可坐二竜宮一、從二醫中一、

取二出陽津之瓜櫛一、投散之、即成二五百本之竹一、以是目無籠組、入

尊送二竜宮一、婆竭羅龍王憐我娘豐玉姬奉尊、玉姬則懷妊、竜王曰、此

皇子可住非人故與娘共送陸、撰州西宮著、建二產屋一、時玉姬曰、中

不立桂而長広、可造二十尋一云々、仍造為二鷗鷗羽於葺萱一葺之、宗

未二葺合一、皇子生故鷗鷗葺不合尊号也、出現尊床敷思潛望二產屋一、

八尋大蛇也、后我媿二本身一捨二皇子一歸二龍宮一、尊惜二余波一御詠曰、

於幾津島、加毛津久島仁、吾寢志、妹々須礼志、世乃古登々々爾

豐玉姬御返事、

懸怒未乃、光者阿礼登以末佐羅仁、

身於志思辺者、古卿仁婦利來奴良志

豐玉姬妹〔延力〕(八〇四)玉依姬奉長二王子一、二神治二天下一、六十三万七千八百九

十三年也、彦波瀲武鷗鷗葺不合尊被棄二母豐玉姬一、被畜二姉玉依

姬一後、為二依姬后一治二天下一、八十三万六千四十二年也、娑竭羅竜王

尊皇王三、故婦二赤土日本者從皇且當南、故号赤土五色、須下鎮一国家一化中緇

素上、朕如影阿形、可守汝弘法、垂跡和光之誓願同應利物之結緣

如斯、左手曳錫杖、右手持御經、現俗陰形、其御迹金器之鈴杵

尺余之白壇、大師取之、帰青龍寺一曳三七重之註連、致一刀之三札、

以二彼白壇一七箇日之間奉刻御体、功成理定之時虚空有告曰、

以我現身入我々入云々御本地、釈迦謂彼木像眼裏境如青蓮、以袈裟囊神体

矣、八五六

大中十一年、於二国清寺一得宣宗皇帝勅、被行真言法華法、則所

靈鷲山地六種振動花四種雨降、衆会儀式經文不違、文殊弥勒問答諸仏出

世、唯以一大事回縁故出現於世、為令衆生開示悟入仏之知見矣、三周説

相畢、一基塔婆地涌出五逆達多預三天王如來記別、八歳龍女遂無垢世

界成仏、二十八品有様四衆八部得益親也、一座行方終奉送鐘鳴、一会

大衆大悦去、見聞諸僧隨喜聽衆賤謁仰矣、

大興善寺逢智惠輪二藏、重兩部大曼陀羅無殘伝之、魏々切日者着

赫々明月増、而弘法大師延曆廿三年二月十五日入唐、大同元年八月帰朝、

已上三年也、伝教大師延曆廿三年四月入唐、唐師順曉和尚惠和同朝、

年六月帰朝、已上一廻、慈覚大師承和四年六月入唐、于時天子武宗皇帝

信二敬道士、破二滅弘法、從二会昌一年至二同六年一五箇年中焚二燒堂

塔二破二却房舍二還二俗僧尼二他国僧徒皆帰二本国、大師迂回或遁二山林、

或凌二風雲、師範巨逢、稟承不易、跼於高天、跼於厚地、隱々

燒々帰朝、唯智証大師當于武宗皇帝早崩宣宗皇帝弘法再興之日、在

唐六箇年窮二顯密之奧、尽二悉曇之章、或時值二仏陀、或時遇二神

明、法悟無塵宗旨融朗也、不思儀奇特不遑二毛拳、既辭二異朝、

大師惜二余波、法全勸二饒別、通流涙金曰、於二唐朝一天予法可二伝

持一無侶、汝帰二本国一建二立此青龍寺、洪鐘印鑑者當寺之重器也、聖教

多羅葉也、広三寸長一尺、思具、仏舍利、大日如來金冠銀草鞋、釈迦如來御袈裟

果、義操、法全、良讚等道具、

出二宝藏一、授二大師二顯密口決血脈相承、如三世諸仏、説法之儀式、我

今亦如是、説無分別法矣、我與汝代々為師為弟子二弘二真言一今般不

可限、汝西來頂戴我、々東行汝為二弟子、天竺金剛智、三藏、不

空、三藏御意一此土弘二通密教、迦葉仏御世日月鏡結二契弘經之意不

淺、加之成二竜猛・竜智二生二金智・広智二師弟蓮化二衆生、為二国有

忠、於家有孝、急伝二東土守二王臣之法、憎二蒼生之福二云々、於二晨

旦法全於二日域一円珍、堺隔国異一身分身貴名限此兩權乎哉、

八五八同大中十二年六月八日晚、御船雖異州一海漫々風皓々雲波煙浪最深壓

浮、誠壺中天地朝坤外夢中身命幻間、且暮累夜送日、同十八日晚景西

刻、沖潮上斜日下、五色雲立異香薰、波濤老々素髮善神現示曰、予是新

羅国之明神也、至二慈尊之出世一為二護持之一來迎也、則同船矣、同十九

日到二肥前松浦郡、文德天皇御宇天安二年御年四、同年八月 奏聞被

下官使、同十二月御上明神與大師御著二淡路島一、神突給竹御杖地逆突

立、則生付從甚至今何度雖二生替一枝損一逆、復所召一雙御杵神体奉

祝之所雖多之、着二此鳴一數日有二御逗留一、尤有由者哉、天神七代

始国常立尊從二四王天一無二地下国一、天王牟搜二大海底、大日謂文字上

御牟溜留凝成一鳥、故云二大日本国一、始三代住二空中一、次三代顯

男女形、終七代伊弉諾伊弉册尊天浮橋之上下立者、此淡路島事也、彼

鳴御上洛二条之石上暫御休息、明神曰、早 奏二公家一建二立一伽藍一可

弘二通仏法二云々、則大師參内被遣二官使一、所持仏像・法門大惣持教・

天台円頓教・俱舍及諸宗聖教七千余軸内新度經論千余卷被運二納太政

官一、明神與大師一共叡山之山王院住、日吉山王權現曰、和尚法早可

運二移此山二云々、明神曰、此有二末代喧事相一、三井法門久住也、可

從二彼土二云々、

故山王權現・新羅明神・別當僧円敏西塔最院、三味座主康清、真如

當時座主命正、等當寺來地形見、更如二大唐青竜寺一也、勝地不可過之、

新羅明神記

奏聞 清和天皇

清和天皇者五十七代之聖王、文德天皇之少母良房女也、從智証於仁壽殿御入壇、其後大師大日經一部講之給、天皇敕聞之、忽通乎世歷讓位於太子、元慶三年五月八日、於円覺寺御出家剃髮、師宗智証付法、(八七八)弟也、後移丹州水尾山寺、終於円覺寺、崩御、天安二年、云二唐坊一造二庵室二安二置仏

像一取二納經論一、爰老比丘來曰、我行二此地一既一百六十二年也、奉侍二來臨一遲歸朝永此寺付二属大師一、隱二於形一響人引二率百千眷属一來迎、先老比丘者弥勒如来、後響人者畴国狭棺尊、位二空中一無數也、尔後变二伊弉諾・伊弉册尊一受二面垂惶根禪一、日神授二代江州滋賀郡為二都城一、神隱其謂多之、一相伝曰、大師仏法弘二此所一明神守護有影向一、鑑二未來一卜二於地一深谷時下二天人一浴二川水一、高山常來二聖衆一奏二霓裳一瑠璃之琴緒殊勝、仍此山時人号琴緒山、三尾明神住給、依之、後人改緒字為尾字矣、

卷向痛尾山紀伊国ニアリ、此山ニ痛尾明神御座ス、則日靈女明神ト申、是則日神ニテ御座ス間ヒルメト申也ルハシククト字也、女ハ女神ニテ渡セ給也、天照太神御名也、太神ノ神樂歌ニヒルメトアリ

称德天皇御宇神護慶雲二己年三月十四日、装束之半尾下引二黒尾一上レ從浦亦正二衣冠一、從二西山一、下二東海一途中行逢通以欣悦一人曰、御事守二

里辺一我護二寺内一諾一群立二寄松隱一今下山風有二雅音一、仰此処号二今下

下、古德書云、此湖海、一切衆生、悉有仏性、如来常住、無有變易、

五波分二五色一立寄四婦二其中一最大波白色一止、故此所云二大波止号二

寄鳥尾三之小蛇有之、則、山松有琴浦波有鼓、景趣殊勝、則此湖变二五度

生二桑原一成二着海一正見替御神也、三尾明神曰、從二劫初一以還奉待遲、

從今以後仏法可有二守護一於越前加賀之間一、現白山之三所一濟二度阿

鼻依生一、大師問云、響人老比丘如何人耶、明神答曰、老比丘者教待弥

勒如来也、響人者三尾明神普賢菩薩化身也、仏法守護御為住二此所一云々、

凡天照太神三之尾有之、

赤伊勢太神宮、黒新羅大明神、白白山権現、合号三尾明神也、普賢黒文殊

此時壇越子孫大友与多大臣子大友都堵牟麻呂出来大師語曰、我慶雲元年

(七〇四)

生今一百四十七歲也、此教待和尚者、魚不有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>喰、酒不有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>飲、常趣二江湖之辺一兼二遊魚之生一、遊二河瀬之際一放二龜鼈之甲一擬二齋食之菜一、不可振舞異樣行儀也、怪見二彼住房一年來龜甲魚骨積成<sub>レ</sub>岳、化青白二色生二蓮花一、彼甲空石橋之辺捨<sub>レ</sub>之、即時甲空成<sub>レ</sub>龜揚<sub>レ</sub>声鳴、仍謂二鳴橋一、于<sub>レ</sub>今号<sub>レ</sub>之、

後拾遺 万代尔千代遠加作松天、折類哉、龜乃岳奈類、松乃美登里者

此教待和尚者、清水寺行叡居士智十一人愛二小女一、誠十二面觀音之

頭首也、委日本神仙伝有之、大江匡衡作也、斯山王帰二本山一明神一般

若菩薩・宿王菩薩・十六善神王身蛇帝王等無量眷属與寺之北野住御詠云、

唐布祿尔、乃利麻保里羅尔登、古志加飛者、阿利氣留物遠、古々乃登末里尔

明神寄二宿三之杉一、御影被<sub>レ</sub>移二幽谷之水一、現在予此二被<sub>レ</sub>仰之以來谷

云三現在之谷一、川云二御影川一、彼杉号二御影之杉一、

貞觀元己卯年十二月廿九日、明神与大師、依<sub>レ</sub>為二当国之一宮一為<sub>レ</sub>礼被

啓二捷部社一、捷部明神刷二衣冠一正二礼儀一出对欣悦、翌日来二臨当所一、

以二飲食一饗心之儀有<sub>レ</sub>之、

同二年二月廿五日、大師円珍別当僧円敏定心院和尙、十禪師增命内供奉、

十禪師增命内供奉、十禪師延最、阿闍梨增欽律師、康濟内供、鴻譽寛平法、皇叔父

円覺寺僧正宗睿花山僧正遍昭相共造二营社壇一、移二当帝御長一重奉、造二

明神御体一御居形二寸於二異朝一御作神與二今御神体一、不二之儀有之口伝、秘々

生身御神体温亦不<sub>レ</sub>拜奉<sub>レ</sub>御面、一万菩薩八萬四千眷属之尔中提頭頓吃

天王之所<sub>レ</sub>願乾闥婆毘舍闍化成二翼鷗鳥一、不生不滅更無二退転之儀一、

聖德太子伝曰、百濟開法師円明法師下水君三人合造并寺下水君勅使開法異朝廣社才智也

醍醐天皇御宇御門、擬大領從七位大友村主夜須良麻呂之妻妾神夢感之、

明神新現示曰、凌<sub>レ</sub>從二異朝一万里之波涛上、有二眷属一則是朕之也、暫可

宿二汝胎内一、放白色之光、抛二入利劍於口中一、即懷妊、延喜十九年

二月廿五日晚、所生男子始為二当社之神司一、從七位大友清村是也、

(八六〇)(九九七)  
一条院御宇長徳三丁酉年二月、竜雲坊先徳慶祚大阿闍梨社務大友為泰東向

社壇改南向、其謂尊星王北斗居其所、而象衆星拱、復棧客或覆船、或落馬、為免神尤、及造替曳土之處、鬪體掘出、諸人之恐怖不少、大阿闍梨見之、金色文曰、觀三千大千世界乃至無有如芥子許、非是菩薩捨身命、死矣、是則釈迦如來往昔之御戸也、殊以奇特之勝地也、感涙數行、宝池德水之鳥、釈尊留身之地、穿鑿高原泉、埋鬪體其上、建社頭、東般若菩薩、西宿王菩薩之御社也、金器鈴三杵有三意趣、埋納之、其夜夢師子來、臥其上、慶祚奇瑞竟、弘曉參社、彼重器上一夜中大磐石、此石即如師子頭、及末代守護神也、此金器鈴三杵者、晨旦国玄超阿闍梨從龍樹菩薩相承之、明神於彼国、在位之時得之、神復大師授之、靈物不輒重器也、春日明神現此殿上、以還

抑当社太神者、海童第三王子安芸国嚴島之御託宣文曰、我是婆竭羅竜王第三之王子也、姉法華提婆之時即身成仏、弟為守護三井仏法一來給、新羅明神是也矣、就御本地秘々口伝多之、

清和天皇御長移之、大師手自明神御体被造、吾朝皇帝從天神七代始一至二人皇百代終一有、二天日清淨觀之儀、地蔵者清淨觀、出家之名也、

昔彦炎之出見尊暫帰海中、一、婆竭羅竜王娘豊玉姫為后、葺不合尊産玉姫弟為高山崧岳帝王、在位之後、顯彼山神奉崇、朱山王、崧嶽帝王為葺不合尊御子、人王始神武天皇是也、忠仁公御女染殿后御夢云、染殿后文、天智者神武再來而今得託生一御覽、清和天皇儲云々、天皇深帰当寺、仍貞觀十年、大師得一天皇勅、令講大毘盧遮那經、被授三申、即位灌頂、皇帝大御隨喜御発心被補天台座主、同十七

未年、神殿琢珂仏閣興甍枕三応竜之虹梁、葺紫駕之鳶瓦、宮殿盤鬱

号楼觀飛驚也、二階梵宇均天、五重塔婆挿雲、頗超過前代之宮作矣、

伊弉諾・伊弉册尊嫡子素盞鳥尊・日神天照太神也、女体御座素盞鳥尊御心惡御座事患給、帰天三十一万五千歳送、從兄尊日神即位文得給、周穆王自釈尊一偈、此神伊弉諾・伊弉册尊素盞鳥尊得給、日神授給

文同文也、

明神從他国遷吾朝、御本意繁多非一、大師從大唐法全大師受三種悉地秘法、神又御在位時、從玄超阿闍梨受彼秘法、新羅国玄超者善無畏三蔵弟子、惠果和尚師範也、付三種悉地、有浅略深秘、大師獨伝深秘上深秘、依之御影向云々、又尊星王秘依伝受也、彼經曰、我七百大劫間、住閻浮提統領衆星守護諸国矣、非大師不行之、非門徒不行之、国家鎮護之大法此神來臨偏依之、亦三摩耶戒、是利劍、文殊形復修南山道宣律師於戒儀、有子細不違羅縷矣、

大都明神定患不二止觀一体御白先開御口、觀生死流転昇沈無常一、於戲被仰貞面疊五德之波一、眉乘八字之霜一、顯本地一、貞御手錫杖化二六道一入二四壁一、貞御經金剛經提婆品文殊、千手經千鉢經等異說多之、

大阿闍梨雅楽寮為泰相議七銷八生以清火調十一膳之昨備進之、其次第昨供御、上料膳、服二膳、殘七膳内、三尾、大師、山王、建部、殿島女、婆竭羅、火御子、

一左薬師 住吉四所 四膳從隆弁位正之時始之、社者悉難向西之、乾鏡者奉対北之辰也、是則伏或方謂也、勸請

二右阿弥陀、三大日、四觀音、文永五年秋天

新羅明神記上

新羅明神記中

三井長吏余慶權僧正者、兼三天台座主、智法行業天下無双、灌頂大阿闍梨授二十八人、円融院御宇、叡山始一行内論議、天元四季(九七八)補任法性寺座主之処、慈覺門徒訴奏云、覺大師門徒已九代所補任也、今當代十代何証大師門徒此職始被補之条、極愁訴之哉、勅答云、慈覺門徒自然之補任也、必守一山乎、乱訴之企甚以不可然、仍諸院諸寺供僧百六十余人并僧綱阿闍梨廿二人悉被停止、公請、偏被除其職一乎、是兩門不和之根源也、因茲僧正門徒數百人退叡山、住觀音院(御宇)、權少僧都勝竿并門徒數十人住修覺院、權律師觀修并門徒三十余人住解脫寺、權律師穆竿并門徒住一乘寺(北白川)、所殘三百余人猶住一千手院、寬和元年九月十三日、余慶權僧正伴永円一參籠当社、七箇日滿夜夢御殿御戸押開吃里吃里、明神示曰、未知識哉、良勇阿闍梨者法全大師之後身也、汝先身者則良勇也、慶祚又智証大師之再誕也、成師成弟子、既弘法一化衆生善哉々々、被仰御入錦帳、夢覺流淚、押憂雖山悦示、現一世知三生、喜中喜幸中幸也、僧正弥致信深益竭仰、

一条院御宇正曆四年(九九三)己未年七月、慈覺智証兩門乱逆出来、同八年覺大師門人等証大師門徒切防之、依之一千余坊各三人同心引率七千余人、雖山來住北石藏、慶祚大阿闍梨住大坊、賀延阿闍梨住山本坊、忠增供奉住修習坊、此外在々所々雖住往長德、以來一向居園城寺、一条院御宇、円滿院大僧正明尊、正曆五年(九九四)甲申月上旬、被送当社三位官途、明神上皇告曰、予疇於晨旦司瓊鑰掌率土、今來日本偏為下守護弘法鎮中衛、皇法也、強不好名聞、不染世間、不可受淺位一也矣、太上皇大恐畏一天之疫病、四海之病死積塚成岳、嚴重御祈禱所北野宮、高野山燒失不知其數、長德元年三月、粟田閑白(道兼公)始名譽公卿八人死亡、長德元年六月大内燒失、同三年重大裏炎上、陰陽

博士勘文云、園城寺新羅明神御崇云々、永承七年九月十九日、明尊僧正被始行新羅祭礼(以一千之數)、社務大友為泰以童兒一勅其役、前代未聞壯觀、大明神感賀託宣和歌曰、

加良布弥乃、利寺里尔登古之、加比波有氣、留物乎右、乃登滿利尔

此御詠者、御影向之始御詠也、重今又託宣自レ是始天下人偏知是云々、

明神和讚(寺門伝記補録)と同文により省略

右カ 有旧讚大乘房觀慶阿闍梨製之、每句貫金玉每字聚瓦磔矣、

此大乘坊觀慶阿闍梨者三王院々主、南院花王院(号法泉坊)、覺助僧都之弟子也、都卒往生之有御託、

相伝曰、新羅大明神本地は大聖文殊也、教待和尚是弥勒如来三尾明神又普賢菩薩而弥勒為二本仏一住中院一、文殊為三守護神一住北院一、普賢為地主神一住南院一、三尊現形三院垂跡三井三院、尤有深致者也、

後冷泉院御宇永承二年、陸奥国六郡之主安倍賴息、貞任、宗任等不從二国宣一、跋扈夷境、有勅為追討彼等、前相模守源賴義朝臣

任陸奥守兼鎮守府將軍進發之日、先參詣新羅靈社、發誓願書曰、

伝文当社權現者、遠來異域守弘法二守王法一、千變万化雲雨難測、

爰賴義不凶蒙一勅宣、試欲得賊首、雖任天宣、猶怖地

望一、願依明神之加護、遂朝敵之誅戮一、若果願念必酬神恩、

宜以所生之一息、列學業之衆徒及子孫期繁榮而已、

永承二年二月日、鎮守府將軍兼常陸守源朝臣賴義、雅樂寮大友為泰請

之、則納社壇云々、

今夜宿錦織僧正行觀房、具語立願之趣、僧正許諾、則鞭浮雲一着府之冠、依御葉事被行天下大赦、安倍賴良即又被赦免、因茲国靜人穩、賴良等誇其赦免、駿馬黄金属託大守一、兼畏二名一改良為時、其後任限既滿欲上洛一、貞任有宿意一射光員軍一、將軍答之被濫吹一、欲誅貞任等、賴時一族九人遂發謀反、十二季合戰是其

濫觴、其間生二男、則是刑部丞義光也、征伐遂得、

康平六年三月十六日、貞任・宗任・經清(藤原)三首伝於京師、被二勳賞、

將軍賴義叙三正四位下一任二伊予守、長男義家叙三從五位下一任二出羽

守、二男義綱任三左衛門尉、三男義光戰場所生為酬二宿願、獻二新

羅大明神、字号三新羅三郎三月十日、出二於此義二而、弓馬之道亦繼八幡

太郎、為惜其武芸、強令三元服、為遂三囊願、以三義光之息男為三

井之学徒、覺義阿闍梨是也、義光以三新羅靈社、為三氏神、建立金

光院、為三氏寺、施三入江州甲賀庄、為三供養、爰義家朝臣如三親父、

以三行觀僧正為三師壇、以三当寺為三氏寺、有最愛息女、兩目共

盲、歎而季久試望三加持、僧正对三少女誦三神呪、自三及眼三血流出、

結三灑水印、水來濯三顔、即而眼明也、義家敬重之余、成三三礼三加三責

重之像、  
天慶三年正月廿四日、為三調伏三平將門、明達内供奉下二向濃州、先

詣当社三祈願云、

覆無二端者天德也、載無二奇者神德也、爰明達蒙勅、調三伏朝三敵、偏

依三明神之威力、欲三施三効源之佳名、七百大劫鎮護國家之御誓願、

為護佛法、為助 王法之御誓憑、有余仰可信而已、

大友清村納社壇  
(一九四〇)

天慶三年正月日

大師入室御弟子  
明達内供奉

敬白

(一九四一)

修僧三十人於三濃州山中南神宮寺、被三行三調伏法、同四年二月十四

日、將門当被三誅日、塗三血生首一出現壇上、護摩煙充三滿山中、臭

香宛如三葬人、同廿五日、將門首入洛、法驗振三舌朝家婦德、

依藤太節中将門額、根本秀里卿三代之後胤也

成尋阿闍梨入唐為三求法、(一〇六〇) 康平三年九月十三日通三夜新羅社、勤行無

二怠、夜欲三殘更、寒色冷月隱三重山、大虛風閑夢現不三分明、御示現

云、論談之味甘三四智三身之口、振鈴之響忘三五衰三熟之身、宜也々々、

急入三漢土可三濟三群生云々、歡喜充三胸流淚臣三押、神鏡所望、則社司

藏人頭泰生一面奉三阿闍梨、(一〇七二) 円慶保胤入請三衣之袂、大雲寺西山麓奉

祝之、延久四年三月下向九州、年六十二歲、同十九日離三日本、七

日七夜任三風泛海、同廿五日至三大唐、大惣持教・天台円頓教・達摩

宗教・五台山記・文殊千臂千鉢經、三井唐院被三送之、

文曆元年五月、四海瘴煙八域挺死亡成三山成阜、爰当寺北院慈護房大輔、

望三一笑之窓、積三鑽仰之功、以三修学之夜、統三行業之日、今般

不出離者、何時終三生死一乎、不三如不三顧三神明之加被者、難三知三成

仏之直道、然則籠三新羅靈社、拔三懇念、或夜夢云、異類異形之鬼

神群三參庭上、曰、天下一同災寺僧少々可給云々、神官一人出对云、不

可三許三当寺衆徒、但助三侍從、式部汝等可三任三雅意云々、則鬼神散、

大輔問三神官、曰、侍從者指非三發起者、式部者稽古拔群習学越三余神

明定、爰惜冥慮寧加護給覽存之处、今鬼神被三放與三之条如何哉、神官

答云、侍從者寺中之興隆者也、其謂初入寺小兒未三付思、或時見三繪興

茶香之遊、或時取三色鳥以三狂言之戲、依三之忘三悲母三隨三師匠三第

一悅也、是則佛法之媒非三統三惠命一哉、復直三義絶向背之中、和三胡越

会稽之思、廻三籌策三成一善友、偏洲僧衆和合樂之法意、式部雖三学

門、触事好三和讒、隨時存三曲節、任三憍慢自利之心、無三化度

利生之益三者也、其上僅不三可三住寺、故吾不三惜入三宝殿、無三幾程

而牛頭馬頭件僧乘三火車一牽來、從神前童子入走下、不三可墮三地獄、

入三我獄一可三濟、曳三牛頭馬頭之圈、二人童子牽三入森中谷奥一給見、

夢覺侍從病惱平喻、愈力式部立受病苦痛逼迫給、寂和尚方便順逆三縁可憑

者也、

実相房阿闍梨頼豪、長門守從五位上有家之息、心營僧正之弟子、真言之

宗匠稟三於唐坊橋行円、授三於公伊法印行勝大僧都等三十五人、行業

内薰法驗外顯、後朱雀院之御宇、明尊大僧正 奏聞、園城寺建立戒壇

之事朝家有儀、或被問諸宗、或被尋諸卿、而諸宗勸申云、天竺晨旦其例尤多、建立戒壇可為嘉政云々、諸卿多云、所申請尤有其謂、早任諸宗勸狀可<sub>レ</sub>行歟云々、爰後三條院屬叡山、聖斷如忘、延久年被下濫宣之間、阿闍梨舍恨籠道場畢、有人來曰、勅使阿闍梨答曰、非戒壇宣下者、更不可<sub>レ</sub>謁、猶為陳子細、押入道場之端、闍梨譏以三面謁、勅使見其面、自香煙中眼有異光、宣下之外不可<sub>レ</sub>觸余言、後三條天皇、免閉扉畢、勅使身毛豎還奏子細、其後不<sub>レ</sub>經幾日、主上病惱事及危急、忽遁天位、祈療之間、賴豪阿闍梨依戒壇事、以法駭奉恨、朝家之由有其告、同比三井鎮守新羅大明神舍戒壇之恨、奉惱主上之由有二宣託、仍延久五年遁位之後、被獻新羅明神、

宣命曰、勅使兵部少輔藤原通俊朝〔寺門伝記補録〕と同文により省略延久四年五月七日遂崩乎、  
御願頭

延久四年園城寺南院建立一寺主上寺額聖願寺下三口阿闍梨禎範 奏曰、一時之内亦有寺額之例如何、勅曰、主上御願皆是寺額、不可<sub>レ</sub>為院号、建立一寺永置之謂也、

百光坊律師慶遷遷カ有一弟子字瑜加坊 長元五月斗敷之日、到大和国寄宿之家有二小兒、歲十二三、粗見操行甚以秀逸也、僧語父母、我師碩學能說人之所悉也、賜此小兒欲<sub>レ</sub>傳尊師、二親承諾、其後斗敷還於本寺語二小兒事、尊師隨喜重遣彼僧、父母語曰、先雖承命、亦有重事、年來多武峯有二師壇之契、來訪曰、不可<sub>レ</sub>遣他所、先迎我峯、即可令登叡山云々、今明定相迎歟、僧作恨曰、某以先度之許諾、奉<sub>レ</sub>師範畢、空罷還者有兒語之訛歟、于時小兒忽以悶絕色變魂消、父母悲泣小兒蘇生曰、我是新羅明神眷屬宿王華菩薩也、大明神是異国名、神誓守智証大師之弘法也、我為侍者同守其誓、可<sub>レ</sub>為大師門徒之人、必遣我等令<sub>レ</sub>加護矣、小兒有先約、今更改

乎、若不<sub>レ</sub>隨命者、忽遣他山、可<sub>レ</sub>奪其命也、二親聞之、打手嗟歎、不<sub>レ</sub>復一言、即授僧畢、彼小兒者、慶耀已講是也委百光坊抄有之、彼已講者、縹門之能書、弘法之再誕也、

堀川院之御時、最勝講々師名揚九天之空、譽殘二方乘之台、白河院之叡願、天台門之論場、弘日再耀、法雨重降、有論言云々、延久五年善惠大師入唐之時、梵字曼陀羅與漢字真言送清凉山、天竺三藏見之、甚以称美、西天猶難有、況於<sub>レ</sub>辺国哉、誰可<sub>レ</sub>及之、復定照云人漢字見入二木之勢、晨旦希也、日本又有<sub>レ</sub>之、大以感嘆、依<sub>レ</sub>勅書二四天王寺額、星霜雖積露点未消、四諦之觀月悟諸部之凝水解矣、

後三條院重供新羅大明神祭文〔寺門伝記補録〕と同文により省略人脱カ

發大威神力依<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>伐之給、終令崩御畢宝算四十、阿闍梨賴豪藏頭泰生抽<sub>レ</sub>懇念、奉<sub>レ</sub>呪詛之、委細之旨不載之、

大僧正覺円、靜円、賴豪於新羅百壇護摩云々、

康和二庚辰季六月十八日、觀円阿闍梨參詣新羅社、情思三世覺母之忝、寧貴二方代利生之恭、弘法神道兼二兩箇、現世当生亘二世一仰而、取信敬而傾頭、斜月照松、曉鐘響枕境節於宝前有読経、其音色澄於一天、其異香遍于万方、洲心肝断感腸、排<sub>レ</sub>經所之戸一見御灯之光、季齡廿有余僧、隨二兩童一人指<sub>レ</sub>天蓋、一人持<sub>レ</sub>金箱、法華安樂行品至<sub>レ</sub>虚空諸天為聽法故、乃至諸仏神力所護故之句、明神自錦帳有御出、文殊師利是法華經於無量國中矣、同音被<sub>レ</sub>遊、不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>隨喜之流淚、彌增<sub>レ</sub>竭仰之懇思、是人得大利如上諸功德矣說畢、神入<sub>レ</sub>翠簾之内、僧出<sub>レ</sub>梯橙之外、今嘗<sub>レ</sub>法喜之甘露、當<sub>レ</sub>禪悅之清風、云<sub>レ</sub>奇特云<sub>レ</sub>宿縁、淚匣<sub>レ</sub>押、円問曰、名字誰人住所何哉、僧答云、予住<sub>レ</sub>此山既送<sub>レ</sub>八百余歲、命曰<sub>レ</sub>教忍仙人、指<sub>レ</sub>西飛去矣、平等院法務大僧正行尊、天治二二五年九月十九日、行<sub>レ</sub>新羅祭礼、自試樂之



時一至祭祠之日、壯觀無双兒童延<sub>二</sub>金銀<sub>一</sub>、飭<sub>二</sub>社司華粉<sub>一</sub>、貫首出仕

大衆見物不<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>筆木<sub>一</sub>、委細之旨有<sub>二</sub>別紙<sub>一</sub>、行慶大僧正法務<sub>平</sub>等院、行

尊大僧正之弟子、白河院之御子、仁平四<sub>西</sub>季九月廿六日、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>新羅

祭祀<sub>一</sub>、第三度<sub>于</sub>時、祭使舞人等色々節々皆用<sub>二</sub>童兒<sub>一</sub>、裝束種々皆以<sub>二</sub>金

銀珠玉<sub>二</sub>飭之<sub>一</sub>、社司之兒有<sub>レ</sub>之、致<sub>二</sub>其役<sub>一</sub>云々、使等先集<sub>二</sub>會食堂<sub>一</sub>、

次行列之時、貫首於<sub>二</sub>橫大路<sub>一</sub>、立車<sub>西</sub>向、後車<sub>二</sub>一兩、前驅<sub>六</sub>人、

後車之内一兩法印觀有<sub>中</sub>宮亮有<sub>綱</sub>之子、各前驅<sub>四</sub>人、導師法印權大都有<sub>觀</sub>養

金剛般若、請僧十人、六學頭等

前日之試樂於<sub>二</sub>平等院<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、僧綱八人、法印權大僧都有<sub>觀</sub>、權少

僧都獻<sub>訖</sub>乃<sub>中</sub>并、法眼能慶、前律師行<sub>祐</sub>撰<sub>津</sub>守<sub>惟</sub>、權律師行政<sub>參</sub>議<sub>家</sub>、已講

覺智<sub>美濃守源</sub>、知<sub>房</sub>之子、

有職廿三人

智實内供<sub>大納言能美之息</sub>、能智<sub>大納言能後</sub>、乘<sub>能</sub>之子、行<sub>乘</sub>之子、增<sub>修</sub>納<sub>中</sub>

言<sub>經</sub>忠、行<sub>曉</sub>大<sub>藏</sub>卿<sub>行</sub>、實<sub>尊</sub>備<sub>前</sub>、行<sub>昭</sub>丹<sub>後</sub>前<sub>司</sub>、慶<sub>智</sub>中<sub>納</sub>言<sub>美</sub>、智<sub>宗</sub>美<sub>乃</sub>前<sub>司</sub>頭、

房<sub>覺</sub>隆<sub>奥</sub>守<sub>信</sub>、秀<sub>覺</sub>、信<sub>覺</sub>、理<sub>覺</sub>中<sub>務</sub>少<sub>輔</sub>能<sub>明</sub>、永<sub>覺</sub>、雅<sub>慶</sub>、豪<sub>禪</sub>僧<sub>都</sub>、公<sub>円</sub>、

敬白時社務大友清生

應<sub>保</sub>元<sub>二</sub>永曆二年四月七日、本寺平等院供養有<sub>之</sub>

太上天皇御入寺日來風聞之間、山僧嫉妬可<sub>レ</sub>妨<sub>レ</sub>之由足<sub>二</sub>叡聞<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>三

使<sub>二</sub>譴<sub>一</sub>召張本<sub>一</sub>之間、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>蜂起<sub>一</sub>、前日雨降、入<sub>レ</sub>夜弥甚、披露曰、

雨降者不<sub>レ</sub>可有<sub>二</sub>御入寺<sub>一</sub>云々、門徒老少專推<sub>二</sub>肝膽<sub>一</sub>致<sub>二</sub>懇祈<sub>一</sub>、或詣<sub>二</sub>

金堂<sub>一</sub>或參<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>、山僧障尋被<sub>レ</sub>降伏<sub>一</sub>畢、而依<sub>レ</sub>雨無<sub>二</sub>臨幸<sub>一</sub>者、山門作

喜寺門招<sub>レ</sub>誘歎、顯教密法祈請不少、爰當社從<sub>二</sub>背碕<sub>一</sub>、黑雲覆電光蒙

大雨喧<sub>一</sub>天及於鷄鳴止<sub>二</sub>於雷音<sub>一</sub>、曉更之後天霽雲散、靈神之威光、三

宝之冥感、衆徒大喜無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>、御幸之儀尤為<sub>二</sub>希代<sub>一</sub>、路次之好粧、緇

素之見物、扨当者也、金堂有<sub>二</sub>臨幸<sub>一</sub>、阿闍梨五口被置之、唐院<sub>臨</sub>幸

八日有<sub>二</sub>臨幸<sub>一</sub>、新羅社<sub>一</sub>、歷<sub>二</sub>橫大路<sub>一</sub>、於法禪院西南之辺<sub>二</sub>大衆延

一曲亂舞之後、散<sub>二</sub>菓句<sub>一</sub>云、斯大路是百舌辺之辻也、辺尤可<sub>レ</sub>刷<sub>二</sub>翅

爰<sub>二</sub>鷄來云<sub>一</sub>、日典可<sub>レ</sub>礼々々々々、人問曰、遲々春日玉齧暖渴泉溢<sub>天留</sub>春<sub>乃</sub>

日<sub>毛</sub>有利、嬾々秋風山蟬鳴宮樹紅<sub>奉留</sub>秋<sub>乃</sub>日<sub>毛</sub>有利、汝鷄<sub>比</sub>此等<sub>乎</sub>指<sub>置</sub>天<sub>一</sub>、一

天之下四海之内何程<sub>乃</sub>目<sub>出</sub>幾<sub>事</sub>乃<sub>有</sub>礼<sub>波</sub>、今日殊<sub>尔</sub>日<sub>可</sub>礼<sub>々々々々</sub>登<sub>波</sub>申

哉、爰鳥飛來云、御幸々々々、觀感尤甚、卿相雲閣解頤、有<sub>二</sub>院宣

被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>散樂<sub>一</sub>、祇<sub>二</sub>候<sub>一</sub>、仙洞<sub>一</sub>、法喜是也、行慶僧正為<sub>二</sub>太上天皇

法之師範、兩部大法諸尊儀軌隨<sub>二</sub>詔勅<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>之、

行<sub>白</sub>河<sub>法</sub>皇<sub>於</sub>二<sub>御持</sub>仏<sub>堂</sub>、上新羅明神與智証大師御影<sub>一</sub>、下懸<sub>二</sub>

桜井大僧正御影<sub>一</sub>、朝有<sub>二</sub>御法施<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>公頭僧正御入壇<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>法住

寺<sub>一</sub>、唯限<sub>二</sub>三井一門<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>供僧并禪衆<sub>一</sub>、喜<sub>二</sub>応元年六月十七日

於<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>御出家御年四十三、御戒師園城寺前大僧正覺忠、唄法印公舜

憲<sub>覺</sub>、御刺手法印尊覺權大僧都公頭也、悉<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>智証門徒<sub>一</sub>、御布施大

相國始被<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>之、帝王御出家之例、孝<sub>謙</sub>女<sub>帝</sub>御<sub>髮</sub>下<sub>給</sub>、法<sub>名</sub>基、後<sub>婦</sub>二

殿上<sub>一</sub>給<sub>二</sub>天、称<sub>二</sub>德天皇申、平城、仁明、清和、陽成、宇多、朱雀、円融、

華山、一条、三条、後三条、白河、鳥羽、讚岐、当<sub>院</sub>已<sub>上</sub>十、

一院御出家之後、於<sub>二</sub>法住寺殿<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>飛驒守有安<sub>一</sub>誦<sub>二</sub>經<sub>一</sub>仕、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>從<sub>一</sub>懷

取<sub>二</sub>出笛<sub>一</sub>吹<sub>二</sub>鳴之<sub>一</sub>、嚴<sub>二</sub>王品、王出家已後、常勤精進於八万四千歲修行

妙法華打上誦誦、經<sub>尔</sub>波<sub>王</sub>出家已<sub>在</sub>乎、已<sub>後</sub>乃<sub>後</sub>乃<sub>文字</sub>珍<sub>心</sub>久<sub>心</sub>乃<sub>誦</sub>付

奈<sub>利</sub>登<sub>曹</sub>、人感<sub>嘆</sub>之<sub>熊</sub>野<sub>本</sub>宮<sub>三</sub>十四<sub>度</sub>、新<sub>宮</sub>那<sub>智</sub>十五<sub>箇</sub>度、滝<sub>本</sub>卒<sub>都</sub>婆<sub>被</sub>

立<sub>銘</sub>文<sub>曰</sub>、

三井智証門人阿闍梨電雲坊行真、每度被<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>之昔、一天聖主今三山行人

成<sub>給</sub>、三井流修驗人面目光花無窮、華山法皇御參詣之時、竜神天降、

如意宝珠一果、水精念珠一連九穴、鮑一貝奉之、宝珠岩屋被<sub>レ</sub>納<sub>レ</sub>之、念

珠千手堂隔屋被<sub>レ</sub>納<sub>レ</sub>之、鮑一滝壺被<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>之、白河院御幸時、海人被<sub>レ</sub>召

云、

新羅明神記中

当社物忌量〔寺門伝記補録〕と同文により省略)

本云 此法者累代物忌量也、旧損之際新書之、社家尚書大友泰之

応永三十二年六月日以社家本書写畢 預永成坊号

新羅太神記下 応驗

延喜七卯年夏比、寬平更衣藤原保子御出家於壇林寺、書写大般若經一部、御夢其經文字乱脱、卷軸不調、悉以不淨也、覺了発願、欲可書改之処、翌夜夢我是三井寺仏法守護新羅大明神御侍者双塚之童子来告「更衣」曰、不可書改、施无畏化身增命和尚可令唱經題經典云々、則請和尚一如法大願満足、同年於淨福寺供養一切經、請二八宗、延喜、(藤原天皇)聖主彼神夢被聞食、於諸宗衆会中三礼增命和尚勅授法橋上人位矣、

永万元年春、可建三摩耶戒壇之由、及奏聞、二条院被成園城寺 院宣曰、一寺浮沈天下大事太以不可然云々、其由彼院逢最雲座主御出家、然間叡慮之趣多在慈覚門、爰寺門大衆恨「朝家不用」宣下「已趣登壇之場」、終以及合戦之義、其後不經幾日、(六条天皇)主上與上皇御向、背天下暫不穩、終日不堪「叡愁」、終夜被惱「震襟」之処、御夢曰、予是三井寺新羅明神眷属般若菩薩、三尾明神眷属黒尾明神也、为上皇来臨、則黒尾欲「寄御枕」者、振鈴声充「満大内」、護摩煙爨「鬚振殿」、玉鉢不分「明云々」、余時般若菩薩大忿曰、吾以此錫杖「可突」玉鉢、錫杖之鳴所可「射給」云々、則被「突被御覽御覺被」流「遍身御汗」、三日不過而、御胸抱瘡二出現、終永万元年五月廿八日

崩御矣、

房覚大僧正法務花林院、大峯葛木之行者

惣持院阿闍梨、三井長吏

仁平三年六月、參籠 新羅大明神社頭、始行一七ケ日供花、勸進

北院学徒為供花衆、新羅夏濫觴也、当二結願日「終二品經」、供養導師

觀智阿闍梨弁説如浦、自夢曰、明神新示曰、汝弁説深甚也、大僧正于時阿闍梨也、

供花之間夢、大明神以「益賜」之、夢覺見枕辺有益、如「夢所」見作二奇

異想、取捧「頂上」、以亦諸人々皆嘆「之」、即入「錦袋」懸「頸行注占相

曰、益是大宝若至「印益位」歟、大明神示「其儀」也、遂兩度補「貫首」、

任「大僧正」兼「權法務」、偏是大明神之護持也、彼益為「師跡之重宝」、

代々相承私曰、要田口花頂也、

大津辺有二品不賤之人、父堀河関白(藤原兼通)余胤、母蘭殿、女齡既雖「及二

知命之年」、敢无「一人之息」、悲送「日月」、愁累「歲霜」、常除「松瑞

之雪、歎「宿因之薄」、寧臥「藜詞之月」、望「託生之縁」、或時夢青衣赤

衣之童子二人来「枕上」示曰、衆生澄「信深之水」、仏月宿「感応之影」、

與「如氷刀」給、見夢覺歸宅、无「幾懷妊生」男子、十二始入「覚智權

僧正之室」、僧正曰、彼母被「與」般若宿王之力、「在生兒」、其名可「

号」若王殿云々、上乘房權大僧都慶智是也、

白河辺有「公卿女」、俄身出惡瘡、洛中洛外名医雖「尽」療治之法、更々

无「其験」、從「幼少」信「觀音」詣「清水」祈「請」之、御夢想云、難「服」

吾力、可「禱」三井寺之「新羅明神」云々、彼憑人參「詣」社、終日終

夜致「丹精」抽「懸念」、明神御示現云、於「過去」誹「謗大乘」、故於「今

世」獲「得疥癩」、可「愧」々々、可「悲」々々、雖然金堂辺有井、是无垢之

淨水也、一度触身者、四百病之業患莫「不」癒之、則任「夢想」彼女子越「

于大津」、汲「寄金堂水」沐之、翌日得「減」歸郷矣、

震旦国有「五泰山」、其中中央云「嵩山」、此山之神則朱山王是当社新羅明神也、為二宗

苗神（備也）二天拳崇之、或時於明州之一国一流二布瘴氣、人惱三乱疫病、

彼朱山王之眷属神從二高山一飛二明州一、顯二童子之形一、不レ積二緇素一不

論二貴賤一、立二巷陌一至二屋宅一、以二楊柳之枝一注二水於病人之口一、

以二雄釵之利一私二鬼於他方之界一、故邪神惡靈皆去二遠国一、万民安穩悉

得豐樂、奉祝二彼童子一号二赤山一也、爰武宗皇帝至下破二正法一賞邪法之

代上、慈覺大師入唐、不遇二師範一者、不レ伝二仏法一、可レ遁无二山林一、

可レ隱无二溪谷一、難捨在レ身者成二還俗一、經二數年一、様々廻二計略一、

種々至二方便一、窺二歸朝之便一、趣二明州之津一、詣二赤山社一、發願曰、

我无為婦二本国一者、最前可レ勸二請此神一云々、仍於二叡山西坂本一一番

奉祝此社矣、

其後、法性房尊意僧正末社必崇二本社一、（九二四）延長二甲年二月十八日、赤山之

辺、奉祝 新羅社者也、

承元四年十月十八日、被行二新羅祭祀一於二明王院一、連々試樂、當日

会合食堂、神輿十一社自御棧所（法神院 西芝原）石田殿下云御出、一番師子、次童

児八人裝束金銀唐衣赤袴天璫胸守、又童子八人裝束金銀水旱風折、神輿

前二行陳之、每二神輿一各十六人同裝束、馬長二大衆五百余人、僕從數

百人皆金銀也、社務正衣冠、致二敬白一止二社頭一、長吏廡、兩寺所司左

右行列（行列也 法勝寺、右左、當寺、右）、次房官十二人、有職十二人、前驅六人、後々六人、

後車八両、道譽二經兼一定真、頭田・田家・尊親・降田等、請僧十六人

六学頭、僧綱十人、此外卿相雲客濟々、棧敷横大路西向十二間、御廐十

二間（棧敷東）、寺中老若大衆童子立見物（薄衣舞頭、又水干）、或北院門、或二王門前、

神役之兒童舞人兒從二大門辻一散、後十九日於新羅社頭舞童有之、貫首

廻廊之正面西、寺中大衆東西經所、高敷无臺、神司（清政）鐘打前刷衣冠委

有二別紙一云々、越二前事号一之、

同十九日曉、御託宣文曰人丁訖十一歲、

繼絶者賢皇也、興廢者聖仁也

昔歸祭祀、今行二蒸嘗一、尤以甚、世既及澆淳、時鄰末法、以何為財

以何為宝耶、福田・高原（毛）無二種時不レ作胡、為崑崙蓬萊（毛）有珠珪不レ常

不レ光、情須惟之、三密之理、三觀之教也、

心池白色（乃蓮花 尔波）可穢、無濁浪（毛）性空肘色（乃滿月 尔波）、可覆無蔭山（毛）、

了円仏性（乃雲晴 礼）、阿字本空（乃月朗 奈利）、現世（尔波）正（具）見色求声（都毛）、後生

尔波、必須覺心成仏、色心不二乃理、可貴可觀勝之无珍宝矣、

同廿日、貫首依別願童舞遣日吉社舞之、興福寺衆徒、牒二送貫首一新羅

祭并童舞奇妙之由有二其聞一、於春日社同被行（レ）之者所望也、周辞再三、

十二月廿日下遣南都畢、衆徒感悅之余、明年閏正月造二高大奇花十一

柄一、差二三綱等送遣（公）之、風流之曲節不レ可二称計一、舞童十一人寄二其

數一、各有和歌送於長吏（風）禪房、緇素群集、賞翫尤甚、第三日本寺衆徒群

臨、三院各別於花下延年、習日依二天氣一皆獻二仙洞一畢（後鳥羽院御所賀揚院御）

建保三年十月廿九日、公胤僧正（法務）入寺拜賀、威儀師二人内惣在應賢紹、

從儀師二人内惣公文賢慶、五所拜賀、金堂・新羅・三尾・唐院・新宮・

於当社奉幣有（レ）之、兼日從貫首素絹一疋白布四丈被送之、

神馬當日也、神主刷衣冠、貫首奉頂戴和幣矣、拜堂之後、出十月会勤豎

義、探題貫首、探題者円滿院大僧正最初也、本覺院前大僧正第二度、今

般第三度也、禪仁百光坊有童児（大納言源頼朝之息）、桃顏紅粉之膚、柳髮青黛之粧、

性聰明心幽玄也、聊依三有（復力）不例之事一、詣二堂社一致二祈祷一、神告曰、

童形則我身也、父母人（胎内）、我遣二般若一宿王二令二加護一、汝今來我

前持禱尤不便也、報木（復力）複即是証禪也、或雲客峯二如意峯一、入二慶範法印

之室一、物語之次客云、

二条院賞二山門一奇二寺門一、応保之比、依二戒壇相論事一、既及二園城寺

回祿一、上皇出二御南殿一、向二当山一開咲、新羅明神遣二侍者一令（罰）

給、上皇自託曰、三井炎上之時、向二如意一山開咲、何時忘之哉、今

欲令念知云々、如斯靈神欽仰有余、当社之御文并侍者如何、答、於御本國一祭祀之時、備一千銀一為三供御一、又御在位之時、以三松木一為御文一、仍明尊・行尊等被<sub>レ</sub>執行祭祀一、神輿之水引等御文者、皆悉<sub>レ</sub>採<sub>レ</sub>松木與<sub>レ</sub>使者之鷓鴣鳥一、此外或蠅或鼯、春從<sub>レ</sub>棹<sub>レ</sub>姫神一、冬至<sub>レ</sub>青女神一、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>眷屬云々、御託宣曰、好<sub>レ</sub>災惡神譬如<sub>レ</sub>夏繩一、固戒<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>宮中一、彼等依<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>放夜半一、丑<sub>レ</sub>尅<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>詣<sub>レ</sub>我前<sub>レ</sub>矣、<sub>(一六三)</sub> 応保三年四月四日、宣旨曰、

受戒事、宣下之後、寺中更以<sub>レ</sub>騷動<sub>レ</sub>不知<sub>レ</sub>誰人企一、呪詛之<sub>レ</sub>由聞食如何、於<sub>レ</sub>訴訟意趣<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>幾度可<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>奏聞<sub>レ</sub>也、衆徒所<sub>レ</sub>三太非<sub>レ</sub>穩便一、且停<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>呪詛一、且可<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>此旨<sub>レ</sub>給上、恐<sub>レ</sub>々謹言、  
四月四日 右中弁雅賴

謹上 大納言法印御房  
<sub>(二〇二)</sub> 建仁二年始 新羅三十講兩証誠  
法印 公胤 着座 別敷証誠座、公胤 于時法印大僧都、行舜 于時權大僧都、一門二人同參、

希代之奇特歎、為本寺別當具所司  
<sub>(二〇五)</sub> 元久二年三月晦日拜賀、先仙洞參 <sub>(後鳥羽院)</sub> 則入<sub>レ</sub>本寺一、為法勝寺圍城寺兩寺之別當一、兩寺之所司六人左右行列 <sub>(左法勝寺)</sub> 次房官八人、次有職八人 <sub>(指カ)</sub> 袍捐賈、次權僧止庵、上皇 <sub>(後鳥羽院)</sub> 御車々副四人警蹕、後車五両、

權少僧都定真、顯円、円家 <sub>(法眼)</sub> 尊親 <sub>(律師)</sub>、隆円 <sub>(已講)</sub> 先拜、金堂、三尾、新宮、唐院、新羅、

於<sub>レ</sub>当社<sub>レ</sub>調<sub>レ</sub>威儀一、奉幣等有之、及數尅、長吏同奉幣等有之、長吏者<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>永元<sub>レ</sub>三月補任之、社務和幣持向上皇、公胤頂戴之、<sub>(二〇九)</sub> 天仁二年九月十四日、新羅念仏始行之、念仏以前神供有之、転供也、

從<sub>レ</sub>宮仕<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>于預<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>預手<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>于所司一、從<sub>レ</sub>三所司<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>于所司一、次所司渡<sub>レ</sub>于堂僧之末一、從<sub>レ</sub>外陣<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>于内陣神主<sub>レ</sub> <sub>(清生、常陸守、)</sub> 神主備<sub>レ</sub>神前一、

当社正面御戸不<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>外、開于内戸服左右之外陣一、付<sub>レ</sub>堂僧於拜殿一、有四面供具 <sub>(菓子、粥食、)</sub> 神役畢出、付<sub>レ</sub>拜殿西之中間着座 <sub>(別座、)</sub> 衣冠也、東四間見聞大衆、北間中薄疊 <sub>(赤、)</sub> 所司居預法眼 <sub>(无着、)</sub> 当寺有二僧一非<sub>レ</sub>修非<sub>レ</sub>學也、但有<sub>レ</sub>一德<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>寺者一、作<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>怙<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>緣人<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>寺一、又龜岳有<sub>レ</sub>僧<sub>レ</sub>、康明 <sub>(云リ、)</sub> 身雖<sub>レ</sub>秀<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>、无<sub>レ</sub>興隆<sub>レ</sub>无<sub>レ</sub>智<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>僧<sub>レ</sub>、忽受<sub>レ</sub>重病<sub>レ</sub>、非<sub>レ</sub>夢<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>、有<sub>レ</sub>一冥官<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>稱<sub>レ</sub>瑠王使<sub>レ</sub>、欲<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>病僧<sub>レ</sub>時、有<sub>レ</sub>老翁<sub>レ</sub>語冥官曰、此僧是予之所重也、欲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>赦<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>、冥官曰、翁誰人乎、瑠王之使未<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>虚<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>、若<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>病僧<sub>レ</sub>者、可<sub>レ</sub>替<sub>レ</sub>他人<sub>レ</sub>也、翁曰、予是<sub>レ</sub>弘法守護<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>明神<sub>レ</sub>、學徒憐愍<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>鎮守<sub>レ</sub>也、可<sub>レ</sub>替<sub>レ</sub>他人<sub>レ</sub>者、可<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>龜岳之<sub>レ</sub>康明<sub>レ</sub>也、冥官云、翁稱<sub>レ</sub>學徒憐愍<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>、彼此人同何惜<sub>レ</sub>此捨<sub>レ</sub>彼乎、翁曰、病僧雖<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>修非<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>、紹隆志深勸人作<sub>レ</sub>門徒<sub>レ</sub>、訪<sub>レ</sub>他不<sub>レ</sub>顧<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>予之所喜也、康明雖<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>修學曾闕<sub>レ</sub>興法<sub>レ</sub>、仏法依<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>豈取<sub>レ</sub>一捨<sub>レ</sub>多乎、冥官承伏、病僧忽平、康明俄死、見聞之輩莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>嗟嘆<sub>レ</sub>、<sub>(二〇九)</sub> 建仁二年權少僧都覺親、本寺修善之砌、說此緣、万人流涕云々、

知足院入道殿下 <sub>(藤原師実、)</sub> 依<sub>レ</sub>二揭<sub>レ</sub>焉<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>効<sub>レ</sub>驗<sub>レ</sub>一、特奉<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>新羅之<sub>レ</sub>靈社<sub>レ</sub>一、每迎<sub>レ</sub>齋祭之日<sub>レ</sub>、必捧<sub>レ</sub>帛紙之<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>一、一期無<sub>レ</sub>怠慢<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>儀<sub>レ</sub>一、依<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>々孫<sub>レ</sub>々經<sub>レ</sub>撰<sub>レ</sub>政<sub>レ</sub>閑<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>也、法性寺殿下 <sub>(忠通、知足院、)</sub> 忠実<sub>レ</sub>男、同追<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>例<sub>レ</sub>一每年不<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>、<sub>(一九七)</sub> 當<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>祠之日<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、以為<sub>レ</sub>恒<sub>レ</sub>式<sub>レ</sub>一、

相伝曰、新羅大明神者沙竭羅竜王第三之王子者大明神御託宣也、依<sub>レ</sub>斯、花林坊大僧正每日転經法花經堤婆品、奉<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>樂、太明神感<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>甚多之、信敬傾首揭焉神驗如<sub>レ</sub>上記、

建久八年、長吏聖護院法親王 大師講座、已講能珍阿闍梨明智談曰、新羅大明神靈感必新、明智云、廿五重病之時、殊祈請 新羅明神、或參<sub>レ</sub>社<sub>レ</sub>頭<sub>レ</sub>一、或枕<sub>レ</sub>刃<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>真<sub>レ</sub>影<sub>レ</sub>一、夢<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>面<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>曰、興<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>、除<sub>レ</sub>病<sub>レ</sub>延<sub>レ</sub>齡<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>、帶<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>翌<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>一病<sub>レ</sub>忠<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>愈<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>例<sub>レ</sub>、忽<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>賽<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>二行<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub> <sub>(復カ)</sub>

除<sub>レ</sub>病<sub>レ</sub>延<sub>レ</sub>齡<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>、帶<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>翌<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>一病<sub>レ</sub>忠<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>愈<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>例<sub>レ</sub>、忽<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>賽<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>二行<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub> <sub>(復カ)</sub>

社念仏一、莊嚴執事雖非二堂僧一、微志如斯、神豈不鄰食壽算八十二乎、能  
珍已講曰、大明神御利生能珍所被勸文云、寿限三十三多年秋之、其歲殊  
慎自二元日參二籠新羅社頭一、転経講讀寤寐祈念深仰三加護一、夢告曰、  
能珍奉向二大明神真影一、々々申二御手賜二算十二示曰、可置二十  
字一、能珍心念算道非学、望唯在二延齡一、年既当二寿限一異能之、当五  
十歟、余算十七年、涯分可足、其後既以七十餘、推二五十一寿限三十三  
之上、賜五十算歟是遂八十、  
三三三

貞応二年十月初日探題權少僧都円聰初度述懷云、某生八九歲之時、相  
鳥羽本覚法橋舌衆相非無、但寿命短促、残年非幾、件比初入寺住二円融  
房一、其程和光坊円印阿闍梨、為二祈二寿算一、參二籠新羅社頭一、及二日  
數二之間、夢異相人來示曰、汝之寿限延不未定、近日住寺円融房頭円  
阿闍梨、同宿少人天年雖促守二其法器一、故延二寿算云々、以此夢告二  
円印阿闍梨一來、語弁豪立者一、其時夢相真偽不能測之、爰題者昔短  
寿幼童愚不弁余算之幾、今年齒既欲滿五旬、官昇二僧都一職臨二探題一、  
豈図少年幼学之昔、可備大会之題者、誠自非二大明神之御加護一者、甚  
所不可然云々、臨座之学徒、皆二拭隨喜之一淚、  
清和天皇貞觀元年己卯、智証大師伝法帰二依新羅大明神之諷諫一、辭二叡  
地八五九化

山一行二園城一、先謁二教待和尚一、々々召二寺氏人大友都堵牟麻呂一、令  
述二建立緣起一、教待是弥勒化身、都堵牟麻呂文殊化身、是大友太政大臣  
之孫、天智天皇第三代之玄孫也、自天武元年癸酉至今今年卯一百八十七年而  
都堵牟麻呂出來曰、生年百四十七、其前四十年、父大臣大友與多之存日  
也、其間與多奉二為二天武天皇四十一代、号清見原天皇、治十五所建立也云々、大  
師問都堵牟麻呂、此寺名謂御井意如何、氏人答曰、天智、天武此御代大  
臣謀反自、持統、三代皇帝誕生之初、汲二此井水二而沐浴、依経二帝用一、  
人二立御井名一、大師改二御名一為三字一、其由何者、皇帝浴水之初、

已垂三代之嘉例、永為二伝法護頂之水一、当届三三會之曉一、呼為三井一

見于緣起文、水之為二鉢頗異二尋常一、夏冷冬温、嚴寒不凍旱越不涸、和  
而易飲甘而難飽、傾二數杯一而不傷、経二數日一而不臭、宿病之人飲  
之平復、頓患之輩嘗之安泰、見証万端省略如右、或云八功德水、或云  
阿耨達池、八功德水者、称讚浄土経曰、一者澄浄、二者清浄、三者甘美、  
四者輕爽、五者潤沢、六者安和、七者飲時除二飢渴等無量患一、八者  
飲已長養諸根一增二益善根一、俱舍曰、一甘二冷三爽四輕五清浄六不臭七  
飲時不損喉八飲已不傷腹、夫水者稟二秋氣於庚之金一、盛正位於北方一、  
養二春禾於震之木一、婦未流於東南群品為之、亭毒万物為之、生育矧  
乎輪王法王灌頂而登位、四大五大在中而施德上供二世尊一、以二闍伽之  
水下一、資二凡庸一以二井泉之潤一者歟、凡地是青龍三井水清法則白牛一  
雲雨盛、可謂智者大師之玉泉、阿耨達池之雲水者也、抑此井水者、九頭  
龍王之住処、教待和尚一百六十二年之際、行之闍伽水也、依二八葉九  
尊秘義一、生死煩惱一時断尽、究二妙覺朗然之智一、說二常住秘密之教、  
授二甘露上菓之力一、湛二八功德水一、為二洗二不增不減之衆生重苦一、以二  
心一法獨鉗一、從二九識円融之竜神口出五瓶智水一、九山八海主无相法身  
龍神、我本尊仏法守護神也、留二最後之一生一、益二閻浮之群迷一、酌二  
金剛薩埵之水一、濂二受職灌頂之頭一矣、一度服之者、減二四百四病之  
業患一、慈尊誕生之時、又成二无垢之浄水一、故九頭一身一丈五尺龍神  
九頭竜王者、以二金御器水花供弥勒一、可現月日時尅、正月七日夜、三月  
三日夜、四月八日夜、五月五日夜、同夏至夜、六月晦日夜、七月七日夜、  
八月一日夜、九月九日夜、十一月冬至夜、各此月日丑尅、勿參金堂、  
水刃有罰有災矣、

清水寺緣起曰、瀧水之源、是三井之流、出二於阿耨達池云々、飲二其  
水一浴二其流一之人、除二病患、增二寿福一、長老教待和尚修行其水、嗽二口  
洗二眼、寿算一百六十二年、檀家都堵牟麻呂伝持彼井、手結胸溢、春秋  
一百四十九歲、同夜須良麻呂一百十九歲、同清村一百十八歲、不遺汎筆、

已垂三代之嘉例、永為二伝法護頂之水一、当届三三會之曉一、呼為三井一

天智天皇、日本詩賦始造、古今序見

我朝太政大臣之始

天智天皇十五年正月五日始任太政大臣、御歲廿五歲、同年十月東

大友皇子(十年カ)、同十一月五日御即位天皇十二年(壬申)七月廿三日入滅

母采女伊賀毛子娘也

與多(七〇四)天武天皇御娘

都堵牟麻呂(慶雲元年生、一百四十九卒)

古今作者、大友夜須良麻呂、大伴列

黑主(宣化天皇後胤、猿丸大夫子、大伴列)

清村(当社社務始、從七位下、延喜十九年、天元四年卒、一百十八)

玉張外少初位下

建部神主始

為泰(明神應對、故秘文從神受之、自其以來相承之、不斷絕、康保四年生、寬治元年卒、一百十八)

泰生(白河院比人、長治二年卒、百三歲)

清生(長承比人、一百十六卒)

政氏(常陸守、九十八卒)

明神應對從神有

清政(正治比人、百六歲卒)

貞政(常陸守卒、康元元年生、元弘二年卒、八十一)

三種悉地(匠師南院、後自日向守、明德二日卒、七十八、參南滿院)

三種悉地(匠師、兵部大輔水和元、二月補任、上卿藤中納言、藏人左少弁藤原俊任奉、文和三年甲午二月廿五日午時生、午年午日午時生、應永二十二年七月廿二日卒、七十一歲)

泰政(式部大輔、遁世法名源祐、橫死)

泰清(侍從、早世)

泰久(早世、泰政養子)

母泰之之嫡女也、子也、上卿

泰広(藤原後輔力、中御門中納言、永享八年十月廿八日、宣旨、大友宿弥泰広宜令任兵部大輔、藏人頭左近衛中将藤原隆遠奉、應永廿七年八月三日生子、年子日子時生)

末世令(此像紛失、雖崇二大織冠之像、此神司之孫不可斷之旨、都幸在生有神託)

大乘房(靜慶有靈夢云云、)

清和天皇(後胤伊予守賴義朝臣、新羅大明神蒙二加被、十二年合戰之間、於二戰場一有二誕生息、心中思量可酬、宿願遂臬賊畢、上洛之日)

叙二正四位下、爰戰場之息武芸軼人、大守云、有二宿願一賽二新羅大明神、而為守業暫借武芸、公必以三子息可酬二曩誓、其戰場之子、

則刑部丞義光、父任二祈願、字号新羅三郎義光、依二父契狀、以三所生息、獻二大明神、花林坊覺義阿闍是也、

義光朝臣建立北院金光院、卜二鎮守明神之近境、一間四面之梵宇、峙二瑞籬之雲、

瑞籬之雲、弥陀丈六之尊容耀二杜壇之月、則以三江州甲賀三ヶ村、

永庇二仏聖灯油之料所一矣、

賴義有二四人之息、先一人加三井門徒、西蓮坊快譽顯密得(關至灌)

頂大阿闍梨位、一人奉八幡、号二八幡八郎義家、一人奉二加茂、名二

加茂次郎義綱、一人奉二当当社、号二新羅三郎義光一也、

清和天皇 貞純親王(始賜源姓)

賴義(伊予守) 經基(義河内守) 滿仲(義河内守) 賴信(義河内守)

賴義(河内守嫡子) 經基(滿仲) 賴信(滿仲)

義光 伊予守三男  
義定 号山本兵衛若狭守 号箕浦冠者  
義経 号栢木入道  
義兼 六条判官代  
義広 錦織冠者

相模權守  
義業 信義 六条判官代 号豊島 号箕浦三郎  
号武田太郎 号資

号古井勾当  
義春 頼澄 河内冠者

実光 勾当次郎 号玉林太郎  
義隆 広義

義清 号逸見冠者  
号平賀冠者 号斐信乃源氏先祖  
盛義 号平賀冠者 号金津力  
有義 住越後国人

安義 号大銅次郎  
敦義 号大銅次郎

延義 惟義 建保年中三井唐院造宮之時 從將軍家  
号佐竹太郎 課九人雜掌、其物奉行、于時駿河守

昌義 忠義 義広

刑部禰師  
覚義 初住花林坊、後金光院之主

雅楽寮為泰者、明神应当人也、寛仁四年三月八日、刷衣冠入二内陣一、

拱云、何為今生於生死之終々、須為当來於解脱之始々、

于時有神勅曰、從今時至終焉、莫忘莫怠云々、

其文曰、所謂諸法如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是緣如是果

如是報如是、本末究竟等觀一切法空如實相不顛例不動不退不轉如虚空

無无所有性一切語言道斷不生不出不起无名无相实无所无量无边无礙无

障、但以因緣有從顛倒生无有生若退若出亦无在世及滅度者、非实非

虚非如非異、不如三界見於三界如斯之事如來明見无有錯謬念々勿生疑

觀世淨聖於苦惱死厄能為作、依估具一切功德慈眼視來生福聚海无量、

是故心頂礼云々、

建久九年正月八日晝、以影之声、明神三種悉地秘法神勅清政、々々百六

歲逝去、常陸守貞政夢、清政成文殊乘師子、放光飛去云々、

貞政三種悉地師匠、乘伊僧正

仁治二年二月十八日、前日向守大友清政神告曰、金剛經无相分第九阿闍

那行者於波、阿良奈幾屋志耶登、可誦之云々、

長承三年通夜、新羅或夢想云、汝可誦仁王經偈曰、

却燒終訖、乾坤烟燄、須弥巨海、都為灰颺灰揚、速波、惠牟志屋宇、可誦

之也云々、

此星 尊星王余 在之密宗 三光礼者日 心月輪中有 月星也是

有三印上印 貪狼星 勃嚕嚩 尊星王中印 日天子下印 月

天子也 南斗北斗 尊星王明星 天子同一体星也、廿八宿同之

尊星王經曰、我於過去從諸仏所得聞說、供大神呪力、此星者蓋也、從是以

來劫一時週尊星經、七百大劫住閻浮提、王更不他州、為大國師領、四天下衆生、中王

得

新羅明神表紙 仰本地一高花藏世界之上、識二化道一、遍新羅日域之鄉海中現形、憶

靈鷲之先蹤林下垂跡疑、五台之宝窟護法願深、期龍花之露一、馥神威

力妙憐、園城之水清、擁護學徒一、猶若影之隨二貌一、扶二持仏法一、

喻於響之応二音一、

色紙形 海中化來、仰鷲峯月、老翁形像、疑清涼風、

色紙形 提婆弁德高、尚借自在威一、鳩鳥其鄙劣、又感二天神応一、沉致二信凝

誠、蓋三蒙二冥欽仰一、

大明神御名、嵩山嶽嶽大王并朱山王大宗朝通人為季特承詢得之、雖春秋

相改寒暑積先聖 後賢不伝此御名、不知時剋相應哉

新羅大神記下

本云(四三三) 于時応永廿年三月日、累代家本朽損之間新本写之者也、努力、

不可他見、兵部大輔大友泰之

爰仏地院法印采算<sup>七</sup>、雅楽寮為泰從神相承之、秘文(四四四) 遠書天被進之處、彼

本失給之間、重御所望、其時之御使某也、于時応永卅一年月日、尚書泰

之曰、泰清 侍從逝去之間、可相統子无之、縱雖尽我子孫、不可尽神之御

代、(四三五) 此本一家相伝之、雖為紀錄汝書写此本而、可耀明神神威光而已、

(四三五) 応永三十二年二月日書写畢、

以上、上中下三帖在之

新羅預常智坊永成法眼

新羅源氏敬神報賽啓白句(『新羅略記』と同文により省略)

以勝仙院僧正正本写之

(二六八〇) 延宝八年<sup>庚申</sup>洛陽新写本

(二八八五)

明治十八年七月、編修副長官重野安繹関東六県出張ノ時、水戸彰考館文庫主管者津田信存ニ託シ、其館本ヲ以テ謄写ス